

林若樹日記・明治四十二年(上)〈九月廿二日～十月廿一日〉

牧野 和夫

ここに翻刻する日記は、林若樹(本名、若吉)が市販のスケッチ帖を手帳がわりにして記した明治四十二年九月廿二日～十月廿一日までの自筆にかかる日記一冊(清書用か、とも考えられる)である。

林若樹の事績については、云うところの「無用之人」にして殆ど無きに等しい。近時刊行をみた中野三敏氏『師恩』(二〇一六年一月岩波書店刊)「はじめに―江戸通の三大人」の筆頭に挙げられた「林若樹」の項目には「生存中に公刊された著書は『川柳 天の声』と題した配り本二巻のみ」という。昭和五十八年に青裳堂から森銑三・肥田皓三・中野三敏の三氏共編で公刊された日本書誌学大系28『林若樹集』所収の跋文(森銑三)並びに座談会「林若樹翁を偲ぶ會」などを参照願えれば幸いである。この日記の入手の経緯、また日記が齎す日本中世文化・宋版書誌に係る資料的な意味などについては、『実践女子大学文学部紀要』五十五集(二〇一三年三月刊)に若干ふれた。日記の明治四十二年の後半以降の分に当たる下冊もあり、本

紀要の次号に掲載を予定している。筆まめで整理整頓好きな三村竹清の「不秋草堂日曆」に比べれば記述の分量は少ないが、興味深い記事も多く、ここに翻刻掲載する。近年、三村竹清の「不秋草堂日曆」(翻刻が早稲田大学演劇博物館紀要に連載)や「南木芳太郎日記」(大阪市史料として翻刻継続中)など、林若樹に親しい趣味家の日記類が紹介されている。符節をあわせたよう興味深いことである。

日記を認めた懐中用スケッチ帖の簡単な書誌事項を記しておく。表紙は萌葱色地の布を貼つたもの(縦11.0×横18.3cm)。前見返しに「表

神保町」の「文房堂」のラベルを貼る。遊紙1葉裏の左寄りに「林若樹記」と鉛筆書、その上方に「紀行」「紀州」とやはり鉛筆書。本文1頁左肩より「明治四十二年九月廿二日」と細筆墨書。スケッチ用のやや厚手無地の画用紙に、約28から32行内外、字高約10.2cm内外で記す。林若樹自筆である。この帖冊がスケッチ用であることは、明らかである。日本画家の結城素明が各地のスケッチ旅行に携行し

た、ほぼ同体裁の表神保町文房堂製のスケッチ帖十餘冊を家蔵し手許で確かめることができる。

翻刻にあたっては次の要領にしたがった。

- 一、本文は殆ど細筆墨書かと思われるものであるが、まま鉛筆書きの部分もある。今回はその区別をせずに翻刻した。
- 一、漢字は常用の字体を原則としたが、書名、人名などの固有名詞については原文どおりとした。
- 一、仮名遣いは原文のままとした。また、原文に見られる改行もそのままとした。原文の句読点をそのまま生かした。
- 一、誤字、脱字、衍字も原文どおりに翻刻した。若樹自筆の「ママ」、及び「()」もそのとおりに翻刻した。
- 一、字の抹消・墨減とその訂正(自筆での)については、訂正に従って本文化し下字については省略した。
- 一、判読不能の文字は□とした。
- 一、小字双行などは「」に囲い、改行は／の如くそのまま翻刻した。
- 一、挿入を示すと思われる小字・傍書については、適当な箇所「」でくくって示した。
- 一、原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、()内にその頁数を入れた。
- 一、挿絵・図・印などは、すべて図版として該当箇所に掲載した。
- 一、なお、本文中には、人権に関わる用語が認められる。大方は資料的な性格を考えて原文のまま翻刻した(一部、変更あり)

が、人権問題の正しい理解の上にとって本文を活用されることをお願いしたい。

明治四十二年九月廿二日 晴朗 水曜日

兼ての約なるイセノ三村清三郎君と共に紀州巡り

を果さんとして午前九時新橋発車にて先づ吉原

なる山中笑翁をさして出立つ朝岡田村雄君宅ニ

見え予ハ乗車同君ハ電車にて新橋ニ見送らる

秋晴行遊ニ可汽車中別ニ記すことなし

三嶋駅にてわさび羊かんの賣声を聞く珍らし

午後二時半鈴川着山中翁出迎「へ」らる直ニ鉄道

馬車にて吉原ニ向ふ途中左富士といへる名所を

過く街道の左ニ不止見ゆるなり相憎今日ハ「山に」雲かゝり

て見えず半時間許にて着同翁宅ニ投す

雑談 夕食後町を見めぐり後山にのほろ途字

シロといふ処を過く古城跡なるへし由来不詳今ハ病院

となりや、登れば駿河湾等一眸の中に収むラバー

岩等の露出するを見る下山又町をありく「登山客なき」今

ハさびれて淋し大宮より電燈を引く駄菓子やの店

頭をてらす電燈ハ不調和也

雑談更のふくくるを知らず

富士郡吉永村字比奈ノ加藤七郎兵エ方二三代將軍より

拝領の虚無僧の鑑札ありそれニハ西ハ大井川東ハ千貫樋ニ

至るこむ僧取締云々とあり此鑑札維新の時紛失、

手代を派出して虚無僧より 徴取せしものといふ（手代ハ

加藤氏ニ金を取めて株を買ひしなりと）

秋の夜や蔵書の癖をかこち合ふ

享保十八年秋八月再写——植松蓮知源七郎編

田子の古道 写本一冊

吉原宿ニ関する最古き書也

駅の替ること三度 往来道筋のかわること五度

初メ 鈴川村西桃町砂山際阿字神下昔爰ニ見「（一）

付を置く、

（約12行分空白）

九月廿三日 晴朗 木曜日

夜夢内ならず六時起床 山中翁の寓居街道よりは

裏手にあたり南は稲田際涯なく其果は田子ノ浦ニ接す

北は富岳高く東は愛鷹、伊豆之諸山西は駿遠之山々

をのそみ風景いふもさらなり入口之傍菜園少許あり

秋草今盛りなり

七時過る頃翁並ニ翁ノ息清子と三人大宮ニ向ふ大宮

は吉原を去る三里許ニありて馬車鉄道通す馬車來

されば少しく徒歩せんとて富岳をのそみつ、行く、行く、

翁之談を聞く行く手ニ見ゆる天守嶽の就ての口碑に

昔天守嶽ニ炭焼の大尺あり粟の種を八石富士の

裾野ニ蒔く（富有をいふ也）天子より御姫様を嫁に貰

ふ小判を持ち来りて御衣に蒔き與ふ長者之を見て笑

て曰かくのこときものは以之炭焼の竈を築くへしと

頼朝公富士の巻符の際諸將卒に饗應すへき盃不足

なりしに此長者にはありあきれる程あり將軍聞て大に

恥づと長者依て其盃を埋む其処ニ節無の芦生す

俗話あなた天守ヶ嶽ヨラクツ、ジ私しや白糸ふちの花（天守ヶ嶽の／ふもと）

傳法の天徳寺邊より布目瓦出る

傳法の三日市場（富）知浅間あり元ハ淵浅間といふ

天龍川の淵なりと」（2）

「吉原より北西数丁石坂に」に膳塚あり膳を貸すといふ傳説あり

此邊石塚をポッコといふ普通此語ハ破衣ニ用ゆ

三日市場の邊等古墳あり

大宮浅間額

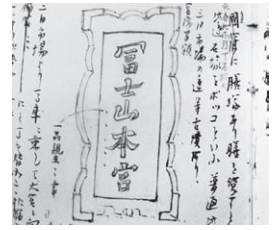
富士郡今泉村字石坂

に鶏頭豆一本蒔けバ

二合を得と弘法に

就ての傳説あり

（額の絵あり）



一品親王之書

吉永村の近在二漢竹権現社
かくや姫を祭りし処其近傍に姫の墓あり
傳法富士山保寿寺(旧七月
廿三日夜虫地蔵として參詣多し)
山門ニ書して曰立春大吉山門
繁盛

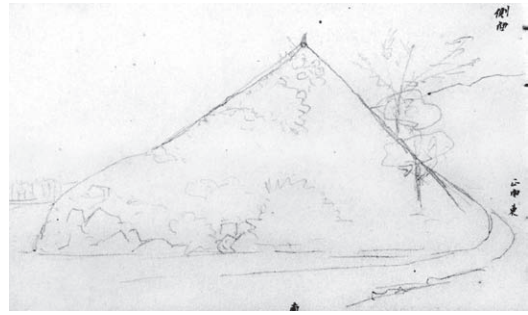
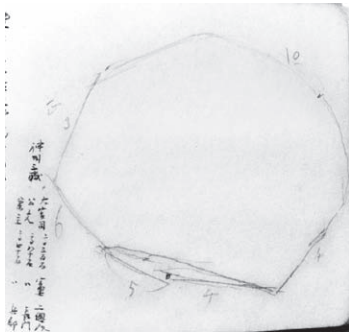
三日市場より馬車に乗して大宮ニ向ふ、傳法、長沢、入山瀬、にて馬を替ふこ、「に」富士製紙の第一工場ありこ、より地勢や、上り「と」なることいち、るし天間、二工場、東新町(此間二三工場あり)に至る既に大宮町の入口也神田町にて下車これ八町のや、中央なり絵はかきなど求めて町をありく長十数町山間としてハ大なる町なり「◎」早けれと昼飯(稲荷すし)をなし富士登山道と別れて左ニ入りて行くこと数町衣掛松の碑あり松は枯れて跡なし(明治廿六年の建碑)木花咲也姫の御子を産ませしとき衣をかけたる松のあとなりと見えたり泉なる発電所前を過ぎ右ニ山をのそみて一丘を越す頂上ニ茶店あり小憩下ればや、平坦なる土地に出つ左に此原を行くこと十数町沼窪の石塚に出つこれは△

「◎大宮」浅間に詣つ境内いと廣く馬場、千住院池等あり泉水湧出清冽玉のごとし維新の初官幣中社となり現今大社となる然れとも維新前ハこ、を東に去ること一里半登山の旧街道に当りて村山浅間と称する処なり此方正当なりしやの疑あり常に両社の間に確執ありて紛紜絶えず或時大宮浅間の宮司より村山の方に一子を養子として遣ハして親戚の好を結へり或年聖護院の宮来り給ひし時(村山は聖護院派ニして宮は一時代に一度ハ村山ニ来り給ふ例也)大宮の宮司も席ニ出て宮ニ富士山「(3)



正面

「(4)



側面

正面東

南

ㄥ (5)

神司三職 大宮司 高三百石 富士 上総介
 公文 高八十石 〃 長門
 案主 高四十石 〃 兵部

本宮といふ額の揮毫を乞ひ深く蔵して後大宮浅間の山門に掲げて其本元なるを示せり

大宮は大日如來を祭りて表大日といひ吉田は薬師佛にて裏薬師といふ大宮浅間は頂上の中央より吉田口八合目迄七合目以下は吉田の支配なり村山は頂上中央より前面を支配して登山者より山役錢をとりて山切手を出す無之ものは登山を許さず大宮ニても出せしが村山口にては通せず此切手の直段村山百卅三文大宮にて八十三文 山切手を室に渡して泊る山仕舞のとき取まとめて登山者の総数を知る
 金剛杖は山切手を渡すものにうるなり(山役所にて)今は大宮の町にてうる「今も」(本宮表口改)と烙「印」するはこれか為也」(6)

山切手は

町 処

・ ・ ・ ・

右山中無相違者也

月日

辻 ○

池 ○

(紙端ニ)

室役人

山伏の家もさんたくになりて古きを知るものもなし

大宮浅間社の傍に福石子育大明神といふ社あり社前ニ

一大銀杏あり昔、大工の崎人あり銀杏に上りて不動を刻む知るものなし銀杏の木葉をふるひしに其姿あらはると其銀杏といふものあり

幹は二抱程もありて其幹の高処二四角なる穴を穿ち

中に小佛鉢見ゆされと熟視するに別に佛体を入れたること

し近頃小さかしきもの、其大工の話によりて新にハメ込ミたるものならん歟

大宮浅間の神主の立咄に大宮司家も(姓富士) 明治三年

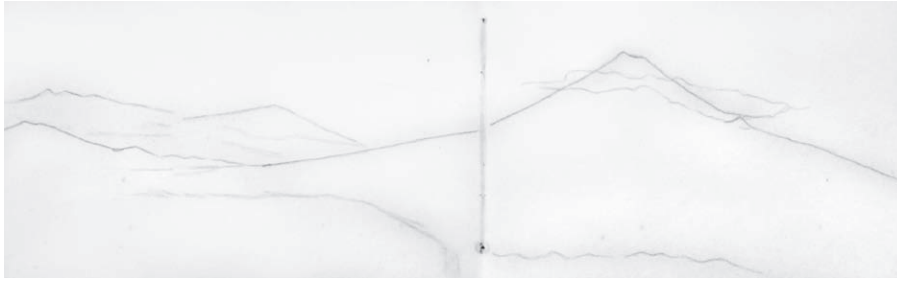
十月の回祿に文庫ぐらも落して僅に糸図を出した

るのみにて書きたるものなし

神庫に薬師佛一体ありこれハ

(約7行分空白)

大宮浅間社は安政の大地震につぶる、山門の 鐘は金石年表にも見えたる名鐘なりしか明治二年二三嶋の金物商に拂ふ」(7)



「(8)・(9)



富士製紙にては支那向の白紙を造る、

此白紙書籍となりて又日本ニ再輸入せらる、かと思へは可笑し

傳法

富士山保寿寺の鐘ニハサヤ形を附す宝永〇年号也

左夜中山の鐘ニハ麻ノ葉の形あり年号を忘る(山笑翁談)

ピラミッド形の石塚ニして一狂人の築きし処といふ前面ニ一小碑あり其文

富士郡大宮町沼窪字小杉原ニ一奇人アリ佐野幸右エ門ト

イフ天性寡慾廉直常ニ摩利支天ヲ信仰ス齡四旬

ナル頃心ニ悟たる所アリ決然捨家起居山野飢えれば則

ち出テ食ヲ乞ヒ倦ケハ則チ山間ニ眠ル只意ニ適

スル所ノ石ヲ見レハ不拘所在之如何不問道之遠近不

擇途之難易或ハ数人合同戮力スルモ運転シ能ハサル

如キ巨石ト雖口ニ摩利支天ヲ二唱スレバ則チ軽々運搬シ

得タリ如斯三十三星霜如一日確固不拔之念遂ニ能ク

此「一大」石塚ヲ積成セリ(周圍三十五間/高廿五尺)是摩利支天此清淨

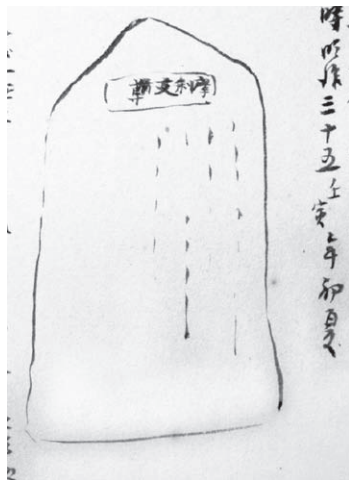
無垢ノ人ヲシテ此舉ヲ成サシメシニ非スシテ何ゾヤ後人

其当時ヲ追想シ摩利支天塚ト称シ専心益深ク徒」(10)

テ靈驗顯著ナリ依テ茲ニ石碑ヲ建設シ由来ヲ略

記シ以テ不朽ニ傳フル者也

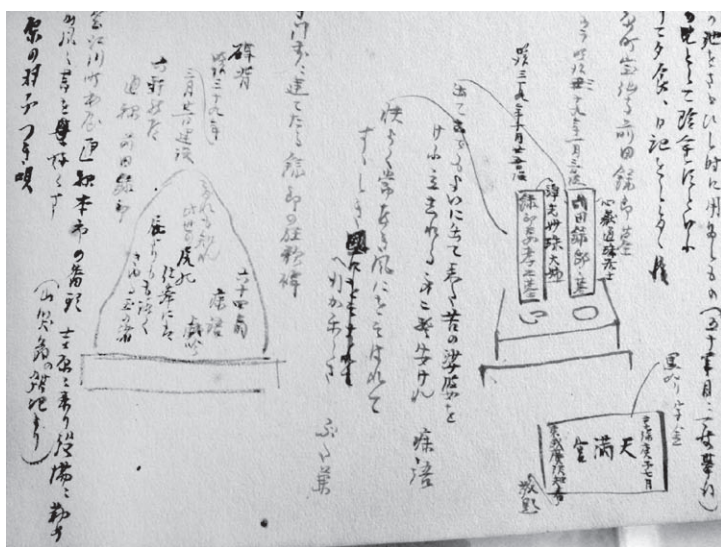
于時明治三十五(壬寅)年初夏



碑文二よれば一狂夫とのミあれど山中翁の古く記す処によれば小杉原の者にて身代さして貧しといふものにてもなかりしか最愛の妻ハ近邊の僧ニ通せしを恨み狂氣し石を積ミ上くること四十年間遂に此石塚を製出せしと明治廿八年より七ヶ年まえニ此狂人炭焼かまに入りて焼死せしを見出せりといふ其娘は大宮西町旅人宿佐野栄七方ニ現存せり(明治廿八と申なり)當時山中翁の測定する処高凡二間半周囲凡廿七間上の石より角を計るに五間余あり石の大き七八寸より大なるハ二尺余のものあり大宮ノ人角田金一郎氏測、高サ二間周囲廿五間、狂人の摩利支天を信し大石を動かすニ摩利支天様、と唱へたりといふことハ碑文ニ同しこれを沼窪の狂夫塚といふ此地高地の一角を占め富士川を「山を距て、」遙に眼下ニ見古墳ニてもあり相な地なり若し古塚を土台として築き立てしニハあらずやなと山中翁ニ語る 時二午後一時

こ、より沼窪村二下り星山の観音ニ至らんとす、又左の山に入り一小径をあなたこなたとさまよひ農夫の教により又一山をこえあえきく漸くにして観音を眼下ニ見下す山上に出つ富士側面ニあらわれけるハし観音境内ニ下る此観音ニハ百廿反の歓音像あり彼岸の時開帳すと聞きて至りしに春之彼岸にのミ拜ますといふに失望す境内ニ美事なる杉の神木ありこ、より帰途につき又大宮に帰らんより富士製紙方二工場 に出る方近きをもて山添をめぐりくして歩むこと四十分許して馬車道ニ出て小憩途中丘上より此邊り一眸の内ニあつまる処を写真す」(11)

馬車来らざれば稲富迄徒歩同処より馬車ニのりて途中曾我兄弟の墓ありといふ 福泉寺はあの森なりと山中翁の指さすところを見て過く五時過吉原町ニ帰着、直二銭湯ニ赴く途天満宮(吉原の氏神)を見る此宮の額は「享保庚子七月」廣沢先生之書なり銭湯はざくろ口を取りたりといふのミにして古風也入口の上にざるをかくこれは去年三嶋神社の池をさらひし時に用ゐしもの(五十年目ニ一度舉行)火除の呪として珍重スといふ 帰へりて夕食、日記をした、め後



吉原町宝仙寺前田録郎墓

ウラ明治三十九年一月三日没 前田録郎之墓(心嶽通珠居士)

明治三十九年十月廿五日没 録郎妻孝之墓(浄光妙珠大姉)

出てこでもよいに出て来た苦の娑婆を

けふ立去れる身こそ安けれ

快よく常なき風にをそはれて

す、しき國へ行か楽しさ

ふた兼

黒ぬり字金

享保庚子七月

天

満

宮

東武廣澤知春

敬題

同寺門前に建てたる録郎の狂歌碑

碑背

明治三十九年

三月廿一日建設

六軒新道

通称前田録郎

六十四翁

寐語

戯吟

たれも知れ

此世の尻の

仕舞には

尻よりももろく

きゆる玉の緒

静岡江川町本屋通称本市の番頭吉原ニ来り役場ニ勤め

蜀山風の書を好くす (山中翁の雑記より)

吉原の羽子つき唄」(12)

オキヨ一ヨオ京 ツネサン十ヨ オ京ヨオ京ツネ

サンセヨ オ京ヨ オ京 ツネサンセヨ(百迄一ツコトラクリカヘシ/テ初ヘ

辰ル)ハ子守唄

寝一ぬと根方へくれてやる(根方ハ富士根/方の山村也)起ると

奥津へくれてやる

山火事の時

山火事やける 虫けらにげろ ホーホ ホラノ貝

子供之詞

うちの前じや 天王様 外へ出れば嫁ッ子

子供に問ひて知らぬといへバ

シラン カンピー ネコノクソ

オドかして オツカナイといへば オツカナけれバコができぬ

吉原手玉歌

コンコン コンサン山マイリ オコンノコトナラ百七ツ ソレホドヒトリテ

ヤルカハリ アスハハヤラク 四十九枚ノ戸ヲ明ケテスマカラスママ

デ ハキダシテ マドノアカリデ カミユ一テ チヤンく茶

釜デ ソコハライ ジイサンバーサン 今朝の茶のコは

ナンチヤイナ ボタモチジルコデ マヅく、一トカケヤーシタ

死亡の時忌中の簾に文字をスカシたるを見たり、

死装束は旅の装束をさせて杖をさせすと山笑翁語る

土人徳松戸作子来話十時半に至る

今日行程四里許山道なれハつかれたり

廿四日 夜来之雨霽れず

六時起床、

笑翁予ト蔵書之為め火災のうれへなき地ニ移轉且つ家屋

に離れて土蔵を建つべく勧告さる且日火災之際は桶と

雀の巢危険なり文久頃の西丸炎上は町方に大火ありて

其火ノ子樋に落ち夫れより雀ノ巢にうつり屋根うらに」(13)

もえつきしなり又、度々の炎上ニ鑑ミ時之御老中

某の計畫ニて大奥と御表との間に七十遍塗の土蔵

を建て列らね(七十遍塗は最上等の土蔵也)口は皆

大奥に向ひ表と奥とは間を通する御鈴廊下は則ち蔵の中を通する様ニし扉銅にて包て万一の際其廊下の銅扉を閉つれば全く其連絡を絶つことを得る仕組なりしか明治初年ニ至りて皇居炎上ニハ一つも残す所なかりしは如何なることなりけん防火も烈風ニ遇ひてハ防くにかたしと見えたり云々

九時頃や、晴れ模様雨もやむ
九時半笑翁宅を辞し馬車にて鈴川ニ至り十時発車にて中泉ニ向ふ又雨ふり出つ今日は見付なるヤナヒメ神社之大祭にて此夜ハ有名なる裸祭あり晴天なれば十万人の詣人ありといふに此雨にてハ如何

静岡にて鯛めし弁当を取る朝のうれのこりと見え飯冷えてまづし
午後一時過中泉駅着乗車雨をついて見付の赤松家着叔父上伯母上のすこやかにましますをよるこぶ宮下のみよ子の牀の大きくなりたるニ驚く離れの家には、成田こと子息友春子を携へてあり

今夜の裸祭みんとて夕方少しく睡眠
夕食後 雑話 雨益々盛也
午後八時成田こと子と同行見附町に行き此町の師家成瀬弥九郎方の二階ニ登りて見物、九時頃よりまんと二三を先き立てそれにつ、いて裸の若者数十人ふんどしの上には、「足の」くろふし迄もあらんと思はる、長きこしみのをまとひうしろ鉢巻にて手に如図



提灯ふりかさし一團となりもみにもんで天神社に向ふ一團毎に一人鈴を手

丈ケ
一尺
五寸許

「(14)

に持したるかヤツシヨイといふ声に和してシャン／＼とひやく其團中よりはミ出されしものは又背中を後ろにして其かたまりの中へとひ込ミてもみにもみぬく 手にせる提灯の光のかたまりとなり押しつ押しされつ、行くさまたとへは池の緋鯉の鬚を争ひて水中を行くに似たり小児の

大きなハ七八才、小さは今年生とも見ゆるに同し様させて肩車にのせて同しく此むれに加はりてもみ行かくせは其子息災なりとの言傳へにより今日ハ雨ふりたれば小さき子など赤き衣につ、み肩車にくみて行くもいたいけなり かくして各組の一團々々

天神社内ニあつまりては又引かへに宵の中なるは夜中に行ふ鬼おどりの豫備にとてするなり 十一時過ぎてハ此團体も皆一ト先其組々にかへり去れり

渡邊書店ニ(集古會員也)行き雑話遠江史蹟瑣談を求む

山中笑氏の発見せる当町宣光寺の「家康公寄進」天正の古鐘は此銘なる霜月廿四日によりて昨年より「此目を以て」縁日となせり 廿一「二」年の頃坪井博士未學生にて巡廻の頃小学の先生某

貝塚の案内をなす其際渡邊氏(隆次郎)小学生なりしか先生か巡査ニ引はられ行くと聞き其あとを追ひて行きたることあり

こと子、みよ子友春子、女中なとうちつれ雨の晴間を天神社に詣つ町の兩側二階ニハ毛唐うちかけて皆見物席とす 所々家の庇より奥迄一面に人のいねた

る様のマグロの荷のつきたる様なるニハ驚けり今日ハ雨なればかゝる家少なきなり晴れの時は家といはず社の空地皆人のふしどとなりて足のふみどころもなしといふ此祭りは此近國切つての大祭なれば遠くは天龍川上よりわざ／＼一年中の楽ミとして出くるなりといふ坂道をのほりて社を拜す拜殿の廊下など休憩の人みち／＼たり又成瀬の家ニかへる 御神輿の

渡御は二時過ぐる頃といへは暫く毛布うち冠りて「(15)

まところむ

午前三時近くなりて雨霽れ星斗爛々たり月の入りと

共に神輿はわたりそむるなり其先各組の団体宵

と同じく万燈(此地にてハ花草といふ)を先きに裸の

人もみにもみて社に向ひて拜殿に上りてもみにもむ身

軀の熱を防かんか為めに水を把杓もてうちかくる

に直に蒸発す一夜二費す水何石といふ餘程頑強

なるものにあられ殿内に十五分より居ること能はずといふ

月の入りと共に合図の煙火を打上くれば一番ぶれわたり

二番ぶれ来り三番ぶれの団体は口々に火を消せ〜と

わめく其時全町一時に火を滅して煙草火も許さず

(此時つき居るあかりは警察署の煙火のみなりしか二三年

来これも消すこと、なれり神威警察に及ふといふべ

きか阿々)三番ぶれ過ぐる二間もなく神輿白丁着

たるものにか、れ一日さんにかけても進みて「町の中央なる」惣社内

に渡御、つき従ふ若もの共皆無言「暗中」手をバタ〜と

二ツ拍子にうちハヤシて馳け行く其音足音のシト

〜と相合して莊嚴なり神輿わたれば煙火上

る之を合図に一時に煙火を点するなり時に四時

半東や、白ミか、れり

廿五日 晴

家にかへれば五時直にふしとに入る 十一時起床

午後又午睡二至る

(宅、山中、三村、赤松、岡田) 山中翁よりはかき

夜八時より郵便を出てかた〜町に行く天神社二詣つ、神輿の

還御既に終り(八時頃になるへし惣社より出社へ)供奉の人数数百人

提灯ふり照らして山を下り来るに遇ふ露店見せ物大方「荷を」片付

け居れり一軒からくりの見世あり兩人側面に立ち「細き」竹杖もて

台を叩きつ、かたみかわりに節をつけてうたふ文句出して

振るへり

妻ハ吉原仲ノ町左右は数多の女郎屋かな

終りに

御目かとまれバ一銭の泣別れ

其節は早口にてあまりにふしハなく軍歌を朗讀するか」(16)

如し

廿六日 曇

六時半起床 庭園を見めくる蕃犬ダムソンスきまどひて

狂ふ露西亜種なりといふ

午前家僕をして裸祭の行装をなさしめて撮影

午食後、「成田こと子と」叔父上に扈從して磐田原へ行く一時間許

にして達、元天神の祠新になれり(赤松家地所内也)其傍ら

なる赤松家の扣家を往來をへたてたる場所にうつさん

とせしに其跡に突然四尺程土地陥落せるを以て

なにか埋没せるニハあらずやと今朝より人夫三人にて発掘

せしめたり子の着せし折ハ既に丈餘を掘れり就て

見るに普通の土地にして別に替ることなきを以て発掘

を中止せしむ

此穴の出来し時一人の人夫落ち入りしか此人夫は元天神の

新築に反対せしものなりしかハ神罪なりといへるもをかし

且つ「初」此穴出来し時より赤松家地所内に穴別出来夫れを發

掘せしに巻物出て直に御上ミに献納せしに御位のいやか上に

貴き上ニ又御位を進められ給ひしなと取沙汰しきり

なりといふ「人恐」今日の発掘を聞かハ又いかなる噂考出

さんか、

ダイダラボッチの跡など見予か所有地をみめぐり赤

松家地所内なる松茸の出る場所など「たど」りしかど未時早

くして無し又元天神ニかへり直ちに帰途につき元來

し路をかへる途中報徳社、寺に山村鑑三郎氏の墓を

展し御さん城(城跡)を見て午後五時帰宅つかれたり

直ニ入浴 夜雨

夜 叔母上より「兩國」葉研堀の「家の」話を聞き家の図取など書して示さる

十時就寝

廿七日 雨

夜來の雨はれず

午前叔母上より前夜の御話つ、きを承る

午後静養 午後雨霽 快晴

宅、三村氏よりはかき来る」(17)

尾張名所図会、尾張志等過眼
 夜葉研堀ノ旧居絵図を引き叔母上の註解を記す
 当所昼間ニても未敷蚊出てうるさし

廿八日 晴

午前 町に赴き断髪

宣光寺ニ赴き刺を通して山中笑翁発見之家康

公寄進之古鐘を拓す鐘は門側鐘楼ニか、れり室内

ニハ漬物桶等二三横ハれり

拓模三葉僧に面會して鐘ニ就て古事を聞く維

新前は此鐘地藏堂内ニ注連を張りて安置し開帳等

之時ニあらされは展観を許さず維新後宣光寺の鐘

學校に差出す(恐らくは賣却せしなるへし)其跡に此鐘

を引出して据へしなりと

午後一時帰宅

午後書見

夜月よし女中など皆國府八幡の祭祀に赴く

叔母上より葉研堀の話承りて十時に至る

手習師匠之事、物見之事、家の様子、稽古事、

宅へはかき三葉封書ニして出す

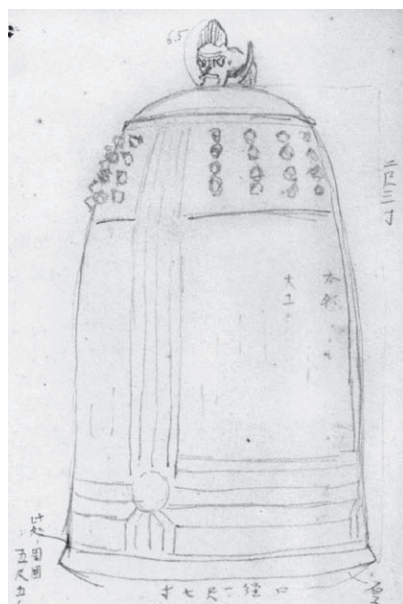
廿九日 曇

昨夜不眠 終日不快 今日名古屋へ発足の豫定な

「りしか一日延して」閉居

午後より雨 夕入浴

中秋無月」(18)



二尺三寸

厚一寸八分

口径一尺七寸

此処・周囲

五尺五分

」(19)

卅日 大雨 夕ニ至りて霽 月出つ
 終日 葉研堀の旧居の図を叔母上の談をたよりに引く夜
 十時に至りて完成
 当所未蚊軍 日中と雖攻撃止まず

十月一日

朝起後園ニ散歩す圃中緑葉煙のこときもの
 一叢をなすものあり近「つ」き見ればアスバラクスなり高
 五尺許蓼々たる細葉露を帯ひて優姿いふへか
 らず加ふるに紅色の小実其間に点綴するをや

午後一時十八分中泉発にて名古屋に向ふ
廣田華洲君方に塔す

(約10行分空白)

┌ (20)

二代目

廣田 伊兵ヱ 狂名 伊勢ノ濱萩〔六樹園側〕〔四谷傳馬町三丁目里俗車力門
兼て尾州御用達

文政元年八月朔日没〔享年六十〕葬南谷富久町善慶
寺法名釈道順

質店伊勢屋

兼て尾州御用達

質店伊勢屋

三代

狂名愚童齋〔号〕梅園 安政六年二月朔日没
享年七十四葬同処

俳諧、並狂歌を詠す

妻信

和歌を詠す手跡は夏蔭の弟子後二山内豊
城を師ニす豊城ハ夏蔭の弟子ニして代稽古
をなす

懐紙

千歳へん松に六十路の古扇
よハひくらへをすなる氣つよき

濱萩

短冊 こそよりのち、む寒さとひきかへて

柳 余ほとひたり青柳の糸

濱萩

上棟 長閑なるはるの日和に棟上

(愚道翁)

鶴舞 空にも千代と鶴か舞ふとは

(約10行分空白)

┌ (21)

(白紙)

┌ (22)

二日

晴朗 唯夜寐くるし

午前八時半主人と同行 御城内を抜け堀川を過ぎ

江川端なる「ボロ」古道具屋にて油壺三、水口煙管一を
求む店は老夫婦のミニて雑然たる中に座す一隅に
記して曰

手附金五日限り流し

並ニソメキ見タラシ一切御断

シャウベン御断申候

同じく江川端にて駄菓子やの軒を並へたる所を通過
し傳馬町通りより袋町なる平井骨董舖に至る

何といふことなく陳列すること数千点なれど扱買ハん
とするものなしに大須ニ向ひて「名古屋一の劇場御園座を横二見」行く途中桑名町にて

又油壺を得ること五、新地「遊郭」を抜けて大須真福寺ニ至
る大須の観音とて境内ニ玉ころかし見世物等あり

りて東京にては浅草の観音ニ比すへし境内
の料理店八千久にて昼食廉價を以て名あり

座敷四畳或は二畳敷多くして東京のごとく入れ
込とせず、二畳敷の中ニ客と藝奴と相對して浅

酌低唱する処作ハ安本亀八ニ御座り升といひたし
真福寺内ニ大石真虎の墓ありと聞けと墓地

二締りあれば見す

七ツ寺を抜け西本願寺境内を通過し橘町の

清涼山榮國寺を通る此寺は京都禪林寺「光明」寺末
元御仕置場寛文五年土器野へうつし其跡に西光院

の住僧可信一寺を建立して隠居所とす同六年丹羽
郡塔ノ地村薬師寺の丈六の彌彌陀をうつし清源庵

といひ貞享二年藤田寺と改京都禪林寺の

住僧貞準を開山とし同し年秋再今の山号寺号
に復すとハ尾張志に誌す処同誌の千人塚

┌ (23)

石碑あり切支丹の族を誅せられし跡なりとあり

其千人塚見んとて尋ねしかそれと覺しきものな
く境内ニ一地蔵堂あり千駄地蔵といひ「亡き」小児の持ち
し玩具等あまたかけつらねたるかあり「堂内の」地蔵菩薩
は新らしけれど其台座と覺しきか「自然」石を築きたるもの
あり思ふに千人塚の跡にて其碑は亡失し其台座
のミ存し千人塚といへるが千駄地蔵ニ変したるも
のならんか尚可尋

東本願寺を抜け熱田街道をあゆむ今日晴れて風
なく歩行けはや、汗はむ程なり「程なく」熱田の一ノ鳥居跡
ニ至る此傍に元、九華軒と称する「尾張」扇を賣る家
あり招牌に元禄頃の風にて朝鮮様御扇とあり今
は代は同しなれと職を箱師ニ転じて招牌も行込
たり入りて其因由を問ふに「記」録も失せられたは詳
細は分明せざれど元朝鮮より扇を折る法を傳へ

岐阜にて業を開き居りしか名古屋城の出来之時
此地にうつりしなりといふ熱田ニ入りて又油壺四個
を得二ノ鳥居跡の菓子舗にて此地名産の藤團子
を求めんとせしに今日は製せずといふ昔はシン粉も
て細き輪を五色ニ彩り一ツニ下けてうれり土産ニハ皆
求め帰へりしものといふ今はシン粉をアルヘイニ代
へしといふ相憎無かりしハ遺憾也

熱田神宮を拜す名古屋よりハ熱田迄一里有余
なるへし境内清水社の傍ニ元ト楊貴妃の碑あり貞
享の頃毀ちしといふ境内の「大薬師跡ノ」茶店ニ小憩す茶店前
に弘法の魚石といふものあり社前の一商賈にて清水
社ニ奉る目をかける額並三猪（予の生れ年なれハ求むノ十二支揃ひであるなるへし）
の額を求め「社前の通りを真直ニ行けは熱田の海岸ニ行く夫れを左りニ」傳馬町
を通過りて裁断橋里俗オンバコ橋
欄干の擬宝珠の「銘」を拓模す其全文左之如し」（24）

（約16行空白）

こ、より帰途ニ就き電車にて廣小路下車日露役の
記念碑を觀る不格好なる砲弾形なり左りへ「武平町通」途中道
具屋二三を素見す何もなし杉ノ町通を直に帰宅す

れは五時なりつかれたり
華洲氏の妹婿なる主税町なる田中幸三郎氏方へ
赴き入浴夕飯を喫して帰宅此日記を認め終れば
八時半なり
名古屋のいろは短歌はいさ、か違へり
いしの上にも三年 ろんごよみのろんごしらす
八十のてならひ にくまれごはよにはひこる

ほとけのかほも三度 とうふにかすかい 」（25）

ちごくのさたもかねしだい りんげん汗のことし

ぬかにくぎ るいをもつてあつまる

鬼も十八 笑ふ門ニハ福来る かわい、子ニハ／たひをさせ

よめとほめかさのうち たていたに水

れんぎてはらきる そてのふりあハせも多少の縁

つきよにかまをぬく ねこにこぼん なす時のえん／まかほ

らいねんのこといふと鬼か笑ふ むまのみ、ニかせ

うちよりそだち いすんさきはやみ

のみといはゞつち おふた子に教へられあさせを／わたる

くさつてもたい やみにてつぼう

まかぬたねハはえぬ やき下駄にやきみそ

ぶかきをのぞんでうすきをしる ころばぬ先の杖

頭人につれハとうのもの てんに口ありかべみ、

あきないはうしのよたれ さるもきから落ちる

ざりとふんとしか、ねハならぬ ゆうれいのはまかせ

めくらのかきそき みわみでとほる

しわんぼうのかきたね えんの下の舞ひ

ひぎともだんごう もちはもちや

せんだんは二葉より すゞめ百迄踊忘れぬ

京にいなかあり

塗上所見

屋こし車（東京にていふ引越車）

二階貸します又むせも（方言にて店のことを／むせといふ）

便所往來に面して為す様に造る（東京と反對）

賣出しの時必ず竹に五色紙をつるして門に立つること

七夕竹のことし 熱田にて見たるは此竹を立て、カシワ大賣出し

スッポンをトチ だんごをミタラシ うなぎめしをマブシ
自転車もたらかすを御断り (26)

三日 晴朗 日曜日

昨夜半目覚めて夢を成さず曉僅にまどろむ

午前九時半華洲君と瀬戸に行く歩むこと里許

大曾根なる瀬戸電気鉄道の十時発車二のの大曾

根は名古屋の郊外にして田甫相つらなりななめよき

所なり矢田河の向ひ二一森林あり華洲君指さして

かしこは長母寺といひ無住國師入定之地境内

二樹木を植ゆれば皆檜の芽を生ずと此寺之崎人

蓑虫老人の遺物を存すと、線路は瀬戸街道二

離合して進む守山、小幡、等を過ぎ印場二至るこ

、は中央に当る

池のかい干とて一村の男工壇上ニ立ち為めニ駄菓子やハ店を開けるを／見る

十一時瀬戸着、この邊り既ニ山近くなりて「小松まぢりの」凡山つら

なりて「中を瀬戸川通し」山陽道の長府邊之景色ニ似たり

朝日楼にて昼食(松茸、卵の吸物、黒鯛塩焼)

瀬戸は瀬戸川を中央にして南北之新街二分つ南新

街の加藤春光氏方に至り窯を參觀

職工賃金上ハ八十錢より女ハ下十錢より二十五錢位

時間ハ朝六時半より日没ニ至る

頃年不景氣にて現在之職工二十五六人位盛んな

る頃は三百人位居りたり窯は五連の上りがま一ヶ個を

持つ

元ト此地之窯元は頗る呑氣にて日限を遅らすことな

と何とも思はず注文したる品の出来上りしかと思へ

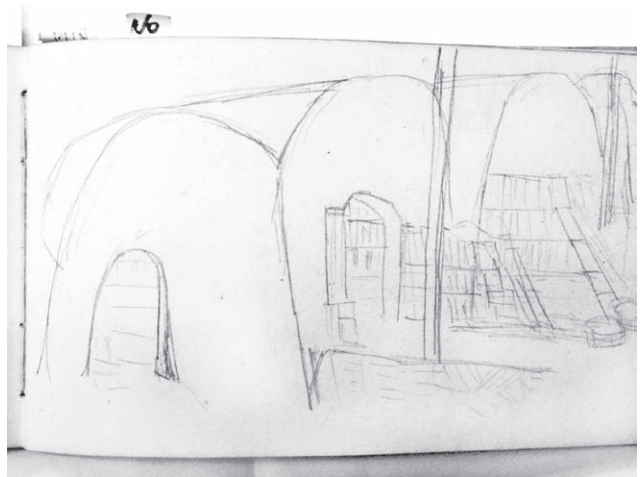
バ茶碗の身のミ焼上げ蓋を都合にて次に延せしなと

いふことありて世話の焼けしものなり頃日は漸く

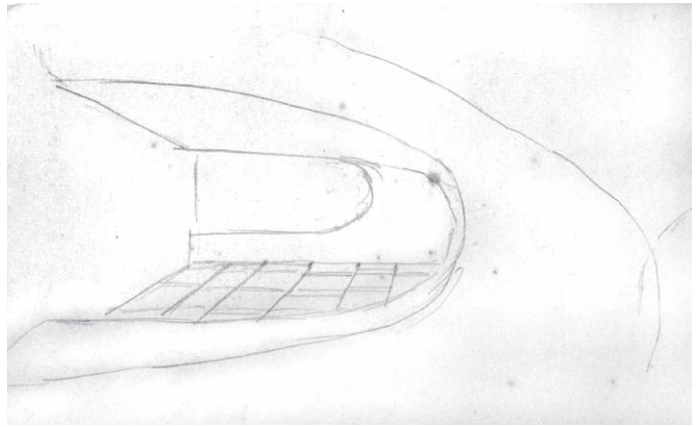
改善して其弊も少なくなりしといふ

窯の内部ニ入りて見る一カマ高さ一丈三尺許

陶器の棚(エ「ブタ」といふ)を陶柱(エといふ)にてさゝえて (27)

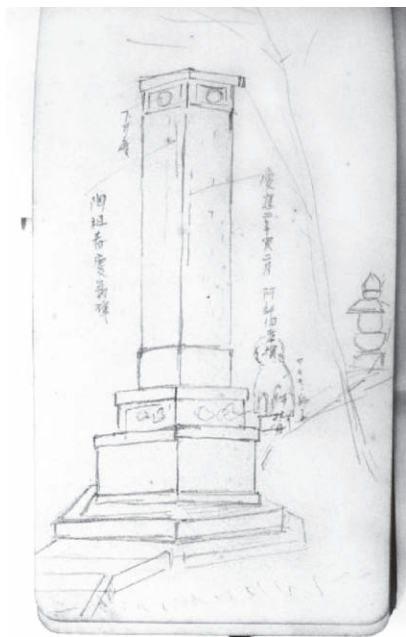


(28)



「(29)

幾段ニモ棚をつくり其内部には生のものを並列し
 あり初めに下なる窯ニ火を入れ漸次上ニのほりて約五日
 ニして焼き上く「初め焼メ又素焼窯ニてザット焼て」焼メといひ夫より上薬をか
 けて「此」本が
 まに入れてやき上くる也窯起しを為して（窯より出す
 をかま起しといふ）荷造をなして名古屋ニ出し上絵をつ
 けて錦がまにかけて製品となるなり
 小窯ニやく時もサマをエンゴロウといふ 窯をつくるに用ゆる
 煉瓦（生にて）をクレといふ
 窯ニ焼メを運ぶに尺板「長九尺許」にならべて其中央を肩にして



運ふ巧妙歎称に値す
 工場にて使ひ居りし陶製のロクロ台は置物ニ欲
 しかりし
 ローズものは夫れく買ふものあり破片等の廃物
 は品川の白煉瓦製造所より窯元ニて一俵を壹銭ニ
 て買行く
 瀬戸ハ現今ニては多く土を肥前「三石」、三河等より取り土地
 よりはガイロメと称する土出つこれを合はして製す
 ゴスなど出るといへとも経済上採取せずといふ
 陶祖「藤四郎」のことは古くして 今の瀬戸の恩人といふ
 へきは「享和より」文化にかけての民吉といふ工人なり
 夫れ迄は土焼多かりしを此民吉今の白の染付
 を傳へしなり
 元トハ信濃、赤津、瀬戸、クチリ、等「同じく瀬戸ニして今は」各ニ製品を
 異にす藤四郎の遺製を傳へたりともいふへきは
 赤津焼なり
 加藤氏の息の饗導ニて藤四郎の碑を見る町よりや、
 瀬田川に沿ひたる一小丘の上において陶製なり慶応二
 年の製作なり碑を囲ミテ あり廟のことし
 碑後五輪塔あり陶祖の墓といへとも信しかたし
 陶祖の釜は椿がまといひこれより尚上手十数丁の処」(30)

ヤキモノ獅子ノ牡丹
慶應二年寅二月 阿部伯孝撰

下野殿

陶祖春慶翁□

— (31) —

あり古くは種々其遺品を出せしものといふ丘上より附瞰す
れば瀬戸町一帯をみ、遠く錦城望むて瀬戸町戸数
三千人は一万二過くといふ盛んなりといふへし
丘上を下り元との道をかへる途近年盛んに玩具店に見ゆ
る陶器の小玩具に絵ノ具をつくるをみかけたり此瀬戸より
製し出すことを知りぬ

瀬戸町の氏神深川神社に詣す瀬戸川より一町許入りたる処
ニあり八幡を祭る社傍ニ小古墳の口にあきたるあり

社後ハ一大古墳状をなし居れり蓋し八幡宮之神
躰なるへし普通ニ此地は藤四郎の陶土を発見せ
しより此地は開けし様ニいへと此古墳を見れば其然らさ
るを知るへし加藤氏に別れ二時五分発にて帰途ニ就き三
時大曾根着徒歩二三のボロ道具屋を素見し四時
帰宅直ニ日記をした、む

瀬戸のステーションにて所見
窯元御用達 傘下駄、足袋等の廣告
瀬戸ニ陶器館あり参考品並ニ現今の製品を陳列す
中に先祖藤四郎の焼きし駒犬一俵あり国宝に列す
といふ今日日曜日にて休館展覧を得ざりしハ遺憾

(3行分空白)

四日 月曜日 曇

午前 中井敬所翁之印状、宅並ニ岡田君へのはかきを認む
午前九時華洲君と又道具屋あるきをなす途中

顔を剃り皆戸町の吉川弘道翁をたつめ翁年七十許
耳聲して大声僅に通ず翁は画師ニして最砂子を置

くに妙なりといふ名越集古會之主唱者にして集古
會々員也種々名古屋の古事を聞かんと期せしか
耳襲して通せざるを以てそこ／＼として出つ御園通りを
又大須の方ニ行き東すし(名古屋にては有名のすしや)の— (32)

支店ニ入りて昼食中々旨し

大光院境内を抜て境内ニ鳥頭座魔明王の堂あり

「祈願するもの」支干の絵馬をか、く元ト大松ありしか枯れしといふ
門前町ニ其中堂を尋ぬ何もなし僅に小寺玉晁の
序ある雅長隨筆一冊を得(自筆本中村又藏雅長元文ノ宝曆頃ノ人)

同町の万松寺ニ六林の墓所を尋ねしか不明万松寺は元ト
大寺なりしか今は南区の区役所ニ貸す程に荒廢せり境
内ニ菊花園と稱するペンキ塗の大夏あり菊細工にてハ

日本にては第一なりといふ今準備ニ忙ハシ
裏門前を通り呉服町通りより本町ニ出で豊田書舗

ニ立寄る主人不在去て傳馬町通りより高岳町ニ入り
高岳寺の門(「元」清洲の城門)を見て主税町の田中氏方

ニ立寄り休憩入浴して夕饗ニあつかふ
小寺玉晁翁ノ家は堀川の下洲寄橋の先キニありたり庭など
掃きたることなく塵埃うつ高し維新前会津の小鉄と稱

する強賊一夜小寺家ニ浸入せしに玉晁翁厚く論して帰
へしといふ

又名古屋ニ一奇人あり水野某といへる「旧」藩士あり自ら天
爵大臣と名のり道路の改修ニ力を尽せしといふ「或時ハ」自ら

ビワ崎ニ至りて廉價ニ青物を仕入れて豪家ニ高く賣り
付け利益は専ら道路の普請ニ費して一文も身ニつげず

時ニハ荷車のあとをしを警官ニなさしめしといふ同人
至れば村方皆出て其業を助けて道路の改修忽ちにし

て成る愛知縣の道路の改善は此人大ニ預つて力あ
りとす明治廿年頃没せし歎更兎ニ角小寺と相對して

名古屋の崎人といふへし 狂人として警察ももてあ
ませり或時ハ「裸体を禁せられし際など」裸躰となりて警察ニ至り暑しノ屋内なら

バ裸体ニなりても構ハざるへしなどいへり
岡田村雄君の山本東次郎と共に吹き込みし「狂言」未廣りの蕃音

機を聞く能く入り居り就中実にもさありのげーにといふ

癖さなからそこに居るか如し廣洲君と共に抱腹す」(33)

堀田璋左右君の当地市史編纂掛主任となりて東鐘木町ニあるを訪ひ久闊を叙して雑話「熱田」裁断橋の凝玉珠の貴重なることを説きて其保存を勧告す早速其法を講せんといふ

維新之際城中御殿の鷲ノ間を購ひしものあり天井、ふすま等を焼却して金三十両餘を得たりと

城外ニ竹なげしの御殿と称する建物ありこれハ卅五円ニ買ひしものありてこれは幸に現存し今海東郡某処にうつされありといふ

蔵書品としてハ
小寺玉晁、先年散逸、細野忠陳(漢学者ノ散逸せり)

熱田、青木文七
〃 醫師ニて某現存

名古屋、本町通り
内田健之丞 郵便局

旧家ニして藤貞幹の縁類ニて貞幹の遺物沢山あり
尾張徳川家ニハ古書数多あり就中東照公之遺物

と覚しきものニハ皆如レ斯宋もて捺しあり宗板高麗



川家ニ秀吉之印と称するものあり
鈕はキリン(「予」按するに獅鈕を見あやまりたるなるへし)

徳川家ニ秀吉之印と称するものあり
鈕はキリン(「予」按するに獅鈕を見あやまりたるなるへし)
陳玄賛 は世間ニ傳ふる程の学者ニハあらず

本等皆めてたし内ニ論語の古写本あり
論語 大本五冊 古写
每卷之終りニ
長享戊申二年八月十三日
心連院宮内卿阿闍梨宏盛
書之(生年ノ二十一)

隠れたる儒者としては
竹野 安斎 (茶人 鳴の後裔ノ慶長頃之人) (34)

朱スリ 大小アリ
カブセノブタ

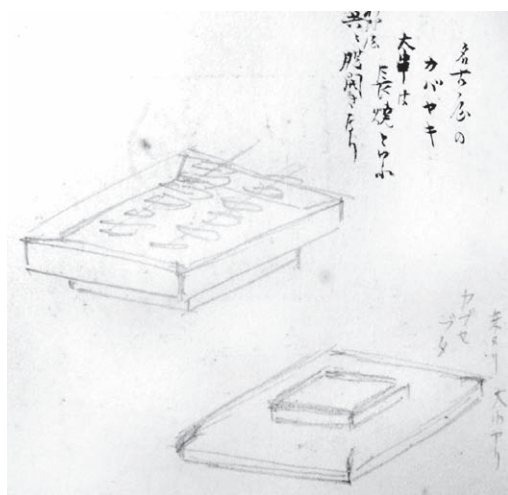
名古屋の

カバヤキ

大串は

長焼といふ

「料理法」共ニ腹開きたり



名古屋ニハ古く水道あり水源は勝川^{カチ}にして堀川の西半部所謂巾下^{ハシ}一面ニ敷設すこれは寛文三年ニ城渥の水不足を補はん為め兼て飲水の為め其他途中の灌漑用、明治初年ニ至りて破壊明治十八年ニ至りて再興今は雑用とす現今十年計画ニて犬山より木曾川の水を取ることに既ニ起工式を為したり

名古屋之狂歌師にして古きハ宝曆頃鳥三(久野其律)あり其弟子? 可童小川氏(古松亭、省亭ともいふ)

六林等のことハ現今有名なる俳諧の宗匠羽(洲)氏、問合サハ分明せん歟(魚ノ棚の通り料理店御納屋のトナリニノ居住)

尾張人物傳等

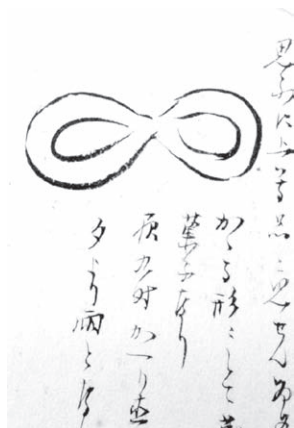
尾張名家誌 二冊 名古屋人物誌 写本 一冊

夜八時「半」辞去途中玄襪といへる菓子を購入ひ

かへる尾張志ニ見えたる板玄襪の一種か鑑入

ニなりあり店のかみさん曰くこれは東京より来ると(35)

思ふに上等品ニ見せん為めにかくいふなるへし



かゝる形にして堅パンの味のことし駄菓子なり

夜九時かへり直ニ就寝

夕より雨となる

五日 火曜日 曇天時々雨ふる

昨夜不眠不快 午前静養

午後「西区玉屋町一丁目」豊田書舗ニ至り階上ニて書籍を見る主人年齢五十左右頭禿にして瘦せたる人物なり姓骨董を好むと見え鯨蔵人形、お土産人形等を出し見する

小寺玉晃翁旧蔵といへる櫛二枚、等を見る

細野忠陳集 大張込帳(多く拓本ノ七冊箱入り)(七十円と称す)

温故雑集

細野忠陳字子高号要齋通称為蔵文化八年辛未閏三月十五日生明治十一年十二月廿三日終享年六十八葬城南大光院

非賣品主人珍玩之書

玉晃翁筆

〔連城ノ文庫〕書籍目録 二冊

同吉原書籍目録(これハ種彦ノ)

劇場評判記目録 一冊

同可見図益志 卷二(三冊) 小寺翁の隨筆也

近藤守重

御写本譜 一冊

右文古事の罫を用ゆ 柱に右文故事 卷 成齋

とアルヲ以て守重の書かといふ不明

主人の話之藤堂家蔵印は(36)



此蔵印ある本凡てよろし

桑名文庫の蔵印ある書ニ

桑名の御うら様の印ニて珍

子の得たるもの この蔵印あり主人同らしといふ其意味予ニ分らずノ仕舞

康富記 古写 大本 廿卷

中原康富ノ嘉吉文安頃の日記昨日掘田君ニ聞きし

〔御ノ本〕の蔵印あり

玉晃翁の雜記

〔明治四ノ辛未〕見聞集 三 一冊

温故雑集

温故雑集

温故雑集

辛未日誌拾遺
 〔乙亥勾棟〕愛知縣下 類雜反古 一冊
 〔乙丑〕御城書〔從正月／至五月〕 一冊
 〔乙亥〕雑々見聞記 下 一冊

抜集夢物語 明治八年 一冊

象貢獻 享保十四年 一冊

雛形ノ本 享保十年 一冊

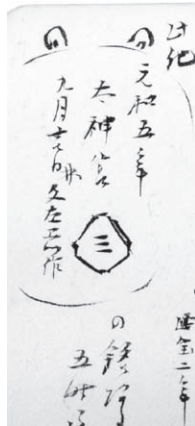
攝州有馬温泉記 写 一冊

續神皇正統記〔藏印面白けれ八買ふ／寛文七年 信慶〕 一冊

解除具物記 写 一冊

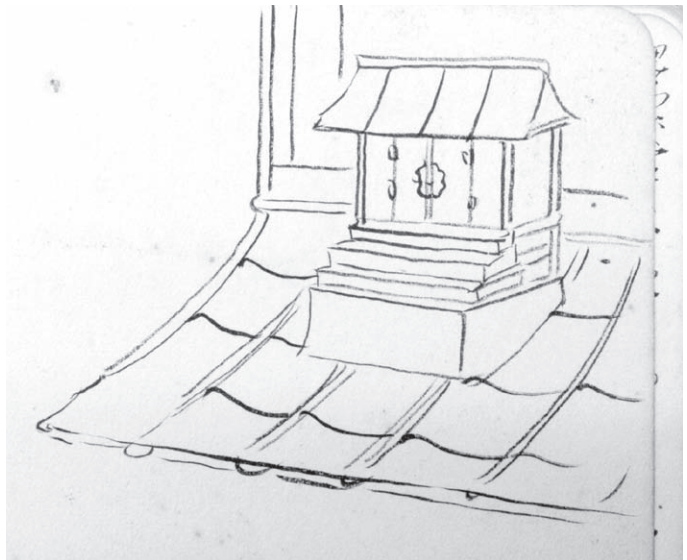
洛陽名筆集目錄 下／延宝二年 一冊

其他

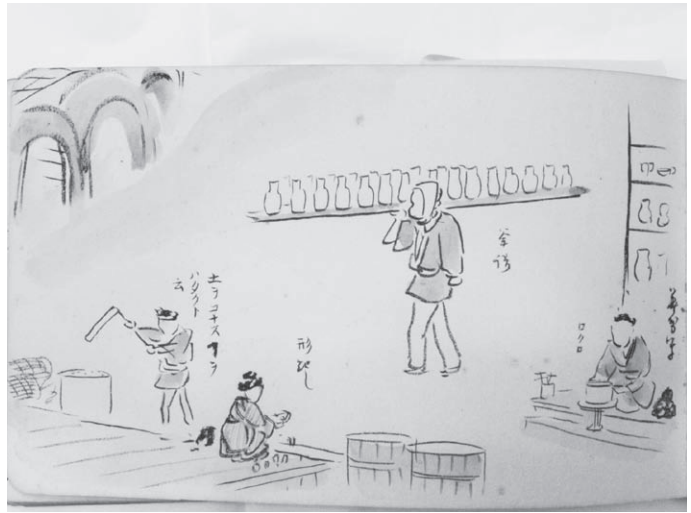


元和五年
 大神宮
 九月十七日〔林〕文左エ門作
 の銘ある古鏡一面を得て
 五時過帰宅

「(37)」



「(38)」



「(39)」

六日 水曜日 曇
午前九時十分発車にて津に向ふ発車遅る、こと半時間許二して出つ此列車は山田行にて亀山にてのりかへなし亀山にて弁当を食し午後一時津着西裏三村清三郎君方ニ投ず
雑話 主人に独驢庵曾谷唯之(印人) 随筆一冊を贈る
入浴
夜散歩八時かへる
七日 木曜日 晴 寒し 裕羽織を着す
午前七時起床 昨夜安眠
午前八時はかきなど主人公と合作、宅、廣田、

岡田、赤松、清水等へ出す
午後市中の道具屋あるき地頭領町の豊住書店
にて正徳ノ火事の制札一枚を求め岩田橋畔より
右ニ折れ「字」ボラ堀より南堀端ニ出て二番町ニ橋本
老人(書画屋にて一奇人)を尋ね
金鶏ノ画賛 半切 一枚
大石真虎 玩具ノ画 横長一枚
を得て午後五時帰宅 真虎之画を得たるハ
欣ふへし 一束
夕食後木村温史堂書店二行き雑書を求め
婦途藤田ニ立寄り九時過帰宅
摩訶止観七、粟田口蔵印、弘道館記述記活字二、唐詩百絶活一、
百人一首古説写五、 天恩廣大活一、
四書入學 五、三角蔵印
八日金曜日 晴 北風寒し
午前七時起床
〃 九時半公園より同裏山之阿濃焼の釜元を
観る五連ノ窯なれと其大さは瀬戸の一にあたる 「(40)」
職工四五人のミ
素焼之飯碗、湯呑、向ふ付小皿等へ楽書をな
して焼上を依頼してかへれば午後二時を過ぎ
たり
竹清君ニ飯碗十数個ニ玩具尽しを書しもらふ
其他旨く出来上りたらはよき土産なるへし
千鳥形の小皿に
蛤に「足を喰」われな浮く千鳥
「小屋かけの」板敷之上にふとん敷きて気を弄す又一興と
いふへし
午後窯元より携へ参りし陶土もて小印を「教個」造りて
夕ニ至る鯨鈕一個ありひそかに其珍をほこる
夜又町を散策す得物僅ニ眉住の短冊一枚
十時就寝
九日 土曜日 晴朗 暖
昨日より、ところの祭礼とて準備にて市中賑ハし

午前豊住書店ニ至る未だ山田の荷着せざる

由にてかへる 午前(当地師範学校長相沢英次郎氏より使もて/今晚、招かる)

午後側子の学校よりかへるを待ち三人公園うらの
阿濃堂元に遊び又、湯呑、菓子鉢等二竹清君の
絵を乞ひ五時帰宅直ニ久留島(岩田橋向)の相
沢氏ニ赴き夕饗を受く相沢氏は西家の親

戚にて氏少時は神六郎叔ニ随伴して能く予の家ニ
来りしことありしといふ王父洞海先生之書幅など
示さる

九時辞して帰途又豊住書店に立寄る若主人先 (41)

刻帰来之内ニ荷物店頭にあり明日を約して十時かへる

(約3行空白)

十日 日曜日 曇時々雨

昨夜ねふれす不快 今明兩日□の祭礼(高山神社と/八幡社と合/併して行ふ)

午前側子を伴ひて町を見めくる店先ニ皆靡を

かけ内ニ屏風など飾る 町の蕭白の六曲屏風
など見つくし

門前町宿屋町の花車を見る門前町は神后皇后

宿屋町のは唐子遊なり「共に」精好なる「機械」人形にて噺

子につれて(噺子も能の噺子ト同様にて三段ノ舞、キリ等に聞ゆ)
人形舞を舞ふ、手を動かし足を運び頭を振りて

巧みに動作す殊に唐子遊のとき一人の唐子

前面にしつらひたる木の杖二片(手)をつき(左の方に

ある金の羽車頻りに廻轉して磁力?を起す為歟)

下と縁を離れて逆立となり片手もて枝に下けたる

大鼓を打つこと数度又元とに返りて座に直る等

かゝる機械人形は初めて見たり

折から雨ふり出しを以てかへる

午後竹清君と豊住書店ニ至り十数個の木箱をか

き様にて数千冊を抜き價を問ふに不分明預け置

きて予は一ト先サキにかへり横臥す窓外騒然たり

此祭りに名物のバリ毛来りしなりと

夕側子を伴ひ入浴

夜主人と紀州行の相談 日記を認め諸処へ手紙を (42)

かく

竹清君を師と仰きて

双六をうちならひたる夜長かな

十一日 月曜日 雨

午前豊住書店にて昨日撰ひ置きし書冊之代、

價を拂ふ店に京都之書肆山田茂助老人あり

西村兼文之贖物談を聞く

兼文は元京都本願寺ノ寺侍なり維新之際ニハ

周旋家となりて幅を利かせたり

贖物を造るに巧にして古経等の年号なきものへは巧

に筆写之年号姓名等を記入せり

青蓮院宮より出たる反古之内より婦去来之賦あり

五六百年以前之者なり此反古十五枚あり

此末の空所ニ 唐 年の年号を印刷し

て一日之中ニ京都の好書家数人を訪れて三円五十

銭より七円五十銭等にてうりつけたることあり後ニ

これは清国の纂喜慮叢書之中ニも入りて唐之

印刷にて持てはやされたり書入等は沢山ニ偽筆

を施せしか印刷之偽造はこれ許りなり

宋板孝経之落葉摺(掖斎の板刻)ありしを前後に附せる

狩谷掖斎の蔵印を切り取り其跡に天山(義満公)

之印を捺し(雨ノ森善十郎?京都代々之鑑定家にして

其家ニハ偽物を作る為めの「刻」印何にても蔵せりこの家ニ

て天山の印を捺す)て古経の紙にて裏打し

て「宋板として」うりたり

平家経に

「奉納」海龍王宮云々と書して按ニ安徳天皇の冥福を祈り

たるものに擬す然れとも悲しいかな学問なき為め

年号を違へて未安徳帝在世之時ニなす等

の失策あり (43)

東寺の宝物調を託せられて出張中、懷中に忍はせしものもあり其他諸寺にて屢かゝることを為す為め札付となりて後ニハ警戒せられたり
商人と結託して偽物を貴紳ニ納めて今現に其家宝となり居るもの少からず天平の古写経にして

谷森善臣氏の家宝のとき其一なり京都にては雨森東京にては斎藤バイブル等なり其手段の一例として云へば予(山田茂助)之家に明板の板本あり其末丁を抜き取りこれを宋板にして御目ニかけて「且三円位ニうりやらんと」いひ

雨森家ニ至りて山田の家ニ宋板ある由價は五円なる由それとなく吹聴し去る雨森より山田ノ家ニ其書を尋ね来るニ價の安ニなりて兼文來りて五円二ひひ置きたれば二円をよこせといふ類なり東京

のバイブルなとよもやくと引かされて能くたまされたるものなりされと三度ニ一度は必ずもうけさせる事故しらずく買入れ居りしなり
当時京都ニ富永冬樹氏裁判官としてあり

兼文は能く偽物をハメ込といふか予をだまされ縛り上げんといふ居りしか矢張り兩三回ハメ込まれたるは笑ふべし

其頃廿二三年以前は奈良等にての古物ハ沢山ありて古写経など予(山田)などハより取りなり奈良に至れば京都より經買に來れりとして道具屋等三五

人一夜につめかくる勢なりし隨而ゼイタクにして天平の年号なきものハ買ハすといふ勢なりし年号あるものにして二円五十錢なり只の經は五六十

錢なりき 東大寺内の八幡宮の庫に大般若經ありこれなどハ一卷三十錢にて買人なかりき
かゝる勢なれば年号なきものは安き價にて求め置きこれに年号を入るゝなり巧ミにハ入るれとも

寫了ノ了ノノ此字中々かけぬものなり
今此豊住書店ニある古写経も兼文の字入なり
とて展して示すに実に巧ミにして虫くひなと除 (44)

けて為し且年号の違へるものニあるに各

其墨眼を異にせり一鉢兼文は愚筆なれど
写経の字は巧なり頭腦明徹記憶力の強きニハ驚くべきものあり写経の末文など能く暗記し居れり
東寺より出たる写経「名を聞きたるか忘る」望人最多く遂に「切りて」五人に頒てり
其一は兼文所持せり近年ニ至り其内ノ一、田中光

顯氏の手ニうつりてより田中氏頼りに完全となさんとて京都の品を書立てんとせしか京都にては田

中氏の方の物を買戻さんとなし居れり

兼文は写経の偽物は巧なるも紺紙金泥の偽物ハ出来さるへしとのことなりしか遂にこれをも仕上げたりといふ

兼文の著書

京都墓所一覽 古書題跋(此原書山田茂助ノ方ニあり)
日本墓所一覽 (原書の題板をひきうつせし也)

(これは子息等ノうつさせて賣りたるなり)
〔山田、評して曰ノ無学の藤貞幹なるノへし〕

統群書一覽 八冊 宮内省に納

殉難烈士の詩を集めたるもの

これニハ城兼文とあり城は

山城の城を取りたる也

兼文は細面の丈高からぬ品よき人品にて低声にて物いふ人なり煙草も吸はず酒も呑まぬ人なり家は窮して根太板を焚付となし己れは疊二疊に座する

といふ風なるも必ず羽織を引きかけ夏も足袋をうかちてチンとなし居り書冊など「袖にかくせる物なれば」少しかさばれば己れ自身持ち帰らざりき天下第一の鑑定家と称せり
十四五年前年五十二三にて奈良にて没しぬ

春日板は古來年代不明なるものなりそれに……校了など書入れたるものありこれにて大凡何時代頃のものなる歟を知ることを得たりと諸博士達よろこばれしも実は兼文の筆なりき

兼文の子息も手くせあしく諸寺ニ出入して席上採集等をやりし為め出入を止められたり (45)

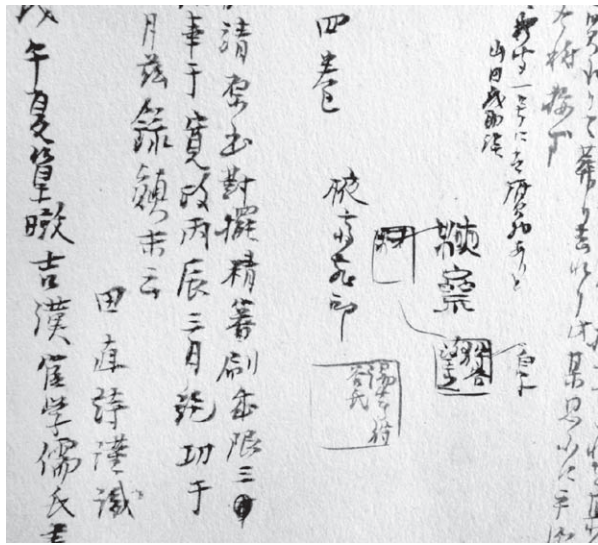
梅尾高山寺のものにも能く書人をなせり此寺の住職

放蕩にして什物多く散逸せり
柏木貨一郎氏蔵の有名なる馬^{うま} 玉篇は「奈良にて」巻四五十
銭の掘出しなり

眼心抄(山田にて近年「山田永年氏の注解にて」彦根の活字にて／百部を限り印刷)
「巻首二出せる」は空海筆と称す

兼文これを破りて空海と称して大坂の某に賣りたるに大に
自慢となし居りしに後に兼文其末尾を携へてこれを某に示
せるに驚きて勿々買取りて葬り去れり此某思ふに平瀬家
二八あらざるかと若樹按す

午後閑談 大阪(朝日新聞一号には雁物ありと／山田茂助談)



夜

三村君蔵書
墨子
末尾
四卷 掖斎蔵印

右依嘉靖原本對撰精著刷成限三
十部始事于寛政丙辰三月訖功于
戊午七月茲録顛末云

跋ノ尾 田直詩謹識
寛政戊午夏竄叢古漢官字儒氏書

柱二

墨子 【卷】 倣倣乾隆聚珍版式本
箕林山房校刊

論語集解攷異 四卷

一卷之末

吉漢官學生合五通古本伊氏刊本
及舊鈔本皇侃義疏陸德明釈文明
監本邢昺正義朱熹注本比對校勘

四卷之末

聚珍版蔵在于箕林山房 増田利房刷印

柱には

箕林山房校刊と 玉河書屋校刊と (46)

両様二入れあり 倣倣乾隆之は同じ
今日之取得書目

耳底記 細川幽齋歌集二、
曆之抄二、年中故事要言 七、

写本

元禄日記二、天文日記一、 元禄頃雜記一、
高彦雜記一、騰勝雜記 檜垣貞雄日次略記一、
神風抄一、 神秘武具(内／外) 陳宝愚録一、
神都春秋 太神宮諸雜事記一、 雜例一、
石屋本縁事、

自鳴鐘時盤考、 東京土産一、
新律綱領一、 太政官誌一、

(射和文庫／射陽書院) 略目錄一、

十二日 火曜日 雨

午前 当地之素封家川喜多久太夫氏主人を訪問し
来る「面会」同氏今年卅二才といへとも卅五六才二見ゆ
る瘦身の人なり旧家代々好事家輩出し其先ハ

自然齋と号して湧蓮門下に聞たる歌人なりき
氏之祖父は又物好にして多く書冊等を貯へたり

去冬当地に谷川士清翁之祭展ありし際「□□せし」其歌集
惠露集は佐々木信綱氏、氏之家より發見せしものなり
氏之祖母は射和文庫之竹斎翁之家より来りし人なり

祖父は好事家にして松浦竹四郎とは別懇なりしといふ

「(47)」

木村にて取得

蘭山十品考一、痲瘡心得筆、水滸傳解一、

かよふ神の講釈一、

川喜多氏も又我黨之士なり

午後竹清君と豊住書店二行く午前少しく見すへき

ものあれは来るへきよし案内ありしによる先日

之口にて「同しく」松木家より出たる古文書(文禄より「至」天正寛ノ水外宮)百通許あり一括し「ての」價を問ふに文書未だ價分

らすといふわさく人を請し置きて價の分

らぬといふは不都合なり勿々たる

夕方より雨霽れ市中賑ふ

夕入浴

夜儺子を伴ひ観音境内之見世物、西洋

あやつり(酒飯、無頼漢と牛肉屋ノ女ヤノ好色漢と女乞食、踊等)並ニかるわさ

(内ニ米人と見ゆるもの一名加はれり)を見て八時かへる

雑談十時ニ至る

十三日 水曜日

朝雨滴之「の」音を聞く、午時より霽れたり

雨天之為め延引せし御祭りも此晴天に俄に景

気つきて花車、屋臺を曳出す

午前竹清君と地頭領町之久須見骨董舖「商船會社出張所にて便船を問合す」
にて屏風一双にはりたる書画「のミ」を求む三村君」(48)

最初十一部を取り予「残り」全部を引受く寛永頃

之茶人之尺牘(多く山田ノ医師ノ久志本式部少輔宛)多し

午後明日出發ニ付荷物の整理をなす

四時儺子を伴ひ屋台等を写真にとる「並ニ三村君夫妻を」

夕入浴

夜市中見物賑ハシ「岩田橋迄ニある蕭白之曾ノ我之討入ニ山陽之賛せし屏風ノ有

名なれと見す」

白銀屋の蕭白之屏風を見る

婦来主人と紀州行之相談十時就寝日記を

した、め十一時就寝

名古屋之書肆玉潤堂へ書目ニより護国園隨筆

三冊を注文す

宅にはかきを出す

十四日 木曜日

起出れば曇天空模様面白からされと西風

吹き居れば日和ニなるへしとて十時出立十一

時賢崎より「はしけ」にて愛知丸ニ「三百八十噸」乗船正午出航

此頃より空よく晴れたり北風に送られ

伊勢湾の波浪をわけて進む右イセノ山之愛

たり二時鳥羽湾口に入る塔志崎左手ニあ

り景色よし同半同湾に投描

秋晴や鳥羽之湊をわたり舟」(49)

「波切に暫時淀泊」夕食うまし「鯛さしみノ川ハギノ肴有」

鳥羽を出て難所と聞ききたる大王崎も蓄音

機を聞きつ、いつしか過ぎぬ事務長旅順之戦

争談をなす内ニ秋の夜も更けたり

同室之桑名之商人にて新宮出しものより新宮

附近之路順など聞て明日明後日は新宮之祭り

なりといふに所謂千歳之一遇なればとて木
ノ本下船之豫定を三輪崎(新宮迄一里廿余丁ノあり新宮ニハ船着かす)
迄延ハし切符を買足す

長崎ニ入りしは十時頃なりこ、より毛布うちかつ
きて臥せしか機械之音、波之音、折々吹き鳴らす
汽笛に一睡之夢も結はずして明けたり所は木

「十五日」之本なり朝日さし出でうるハし時ニ五時
七時出錨九時三輪崎着船をすて、上陸「海岸」奇岩
列ひ立ちて景色よし

海濱にある漁船各々五彩をもて色どりて美ハし
其二三をうつす

や、海濱を歩いて左の山道ニ入る小丘いくつか越えて
向ひに新宮の町見えたり「一里廿余町」此邊之農夫多く牛を使
へり農婦物を頭にのせて行く

町に入れば御祭りとて國旗と共に門口には軒を越ゆる
はかりニ榊を門並に立つること門松のことし

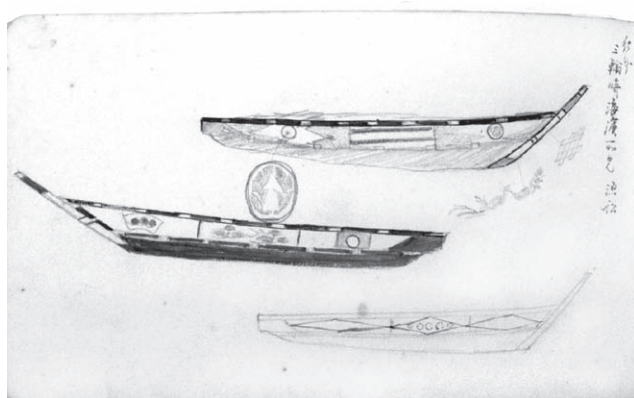
魚うりの女天秤にてザルノ中に魚を入れ上に木ノ葉を覆ふ
イワシニヒラキハドジャン

クシヤ〜と聞ゆ
旅館油屋ニ投ず新築にして心地よし

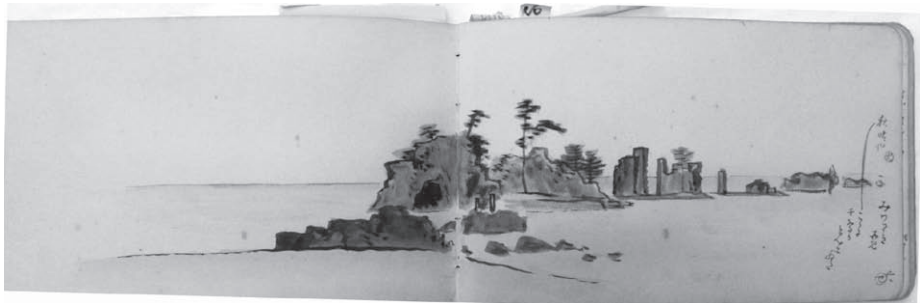
午食に鮎膳に上る
秋鮎の

午後新宮に参詣境内いとひろくして」(50)

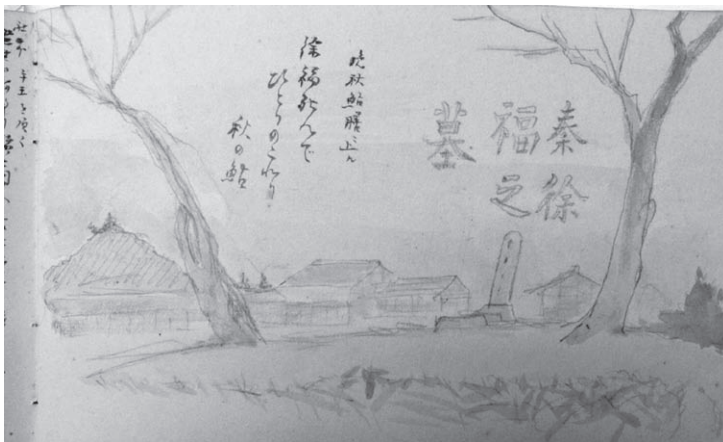
紀州
三輪崎海濱所見漁船



」(51)



「
52・
53



「
54

秦徐
福之
墓

晩秋鮎膳ニ上ル
徐福死んで

ひとりのこれり
秋の鮎

社前 午王を頂く

芝生のあたり諸ノ商人店を出して賑ハし土地の玩具

もかなと見廻るに皆大阪出来ニて面白からず

社傍の河原に競馬の見世物か、れり遙かに熊野

川の水見ゆ碧色瑠璃之如し

町を見めぐり丹鶴城の旧趾を左手に見つ、一坂を

下れば稲田うちひらけり「田の中に」二本の枯樹「樟樹なりと」の下

に一碑あり題して秦徐福「之」墓といふ徳川頼宣

卿の建つところと往昔徐福は木ノ出町の東波多須

浦なる矢賀ノ磯に着し暫く居りて後新宮に移り

住みたりといふ波多須古へは秦氏に作り矢賀の丸山に

徐福之墳ありしか海嘯の爲めに流失せしといふ徐福

といふは當らずとすとも古く支那より漢氏時に上陸

せし地なるへし

帰途山本周次郎氏を訪ふ遅れて又二客あり一は

土地之人、此地の談を聞く

熊野浦一帯之松魚船は五彩を以てかざる

これ徐福之乗り来りし船の遺制なりと傳ふ

椿之葉に刻ミ煙草を巻きて喫するも古き風

なりこれを生柴といひ十葉廿葉ワラも一括

として荒物店口ニうる其香味、柴の香と相混

して一種之芳香を發し一度其味を覚えは終生

捨つること能ハす故を以て椿の葉を取り其色

のあせさらん爲め瓶に封し折々水を打ちて保

有につとめしものなり先づ其葉もてキサミを

くるくると巻きて口にくわへて巧に喫して口を放

たす喫しつ、一方よりつばを吐くなどす其火の

口元に来りてあつき処うましといふ維新前

など当地のもの、京都などの上にこの葉を携へて

行きしものもありと

丹鶴叢書を作りし水野中央侯は鶴峯院と諡して
其墓本廣寺に在す侯は桜田変後国に帰へるに駕籠
に替玉を使ひしといふ然時人に疾視されたると
丹鶴叢書之板本維新後宮内省二献すと聞く(?) 其一

部散逸せり

当処之玩具といふものなし元と此地は原料のミを

供給する地にて材木は其まゝ、鯨、鮫、鯰等之牙髯

等加工せずして輸出せしものにて近來他国より

種々の職工入り来りて漸く箆筒其他も出来る

様二なれり

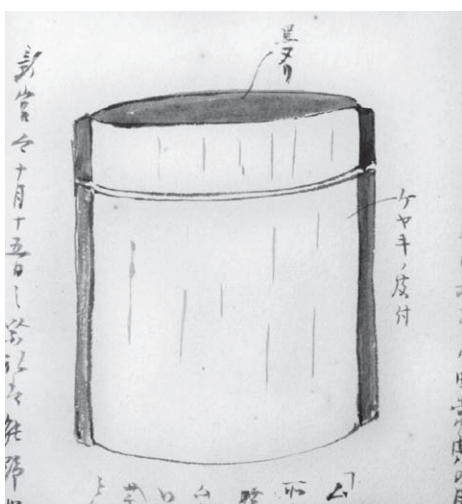
当地にて現今土地の事を能く調べ居るは山田

と小野某なり山田氏は山田常典の息なり(山田常典は丹ノ鶴叢書ノの板下を書きし

也)

ケヤキノ皮付

黒ヌリ



「ムサシ」といふ

所にて製す

腰下げ

ムサシヤロウと

いふヤロウは

菓籠之略歟

と竹清君いふ

新宮今十月十五日之祭礼は能野地なる飛香
之宮之祭礼なり
明十六日は新宮の祭神速玉命之祭日なり今十五日
徐福のもて来しといへる鞍を神馬に着けて河原に至
る

(56)

十六日は神輿 河原より乗船九隻之漁舟に曳かせて
上流の駕にわたり漁舟は只駕を周廻して競走
すと

正月六日「夜」神宮側面ニ聳ゆる神倉山より松明をかきして数千
一時に町下りて競争すこれを御燈祭りといふ
辭して本廣寺に詣りて墓所を拜せんとせしに墓所は
数町と距る「中学校近傍に」処ニ一畫をなしてありといふに明日ニても
とむらんとて一旦帰宿暫時にして又新宮の御
馬のワたるを見んとて行く神官十数、楽人三人、
巫子一人あり神主神扉を開きて神馬に鞍置き上に巴に
唐草の紅の覆ひかけ二人の僕丁口を取りて階下
に進めは御魂を鞍上に安して中門を出つ警固の上卜
先を拂ひ次に楽人、次に鳥かふとにて鉦持ちたるもの
二人、次に巫子、「傘をさしかけ」次ニ神馬を曳き十数の神主其後に隨
ひて門を出て町を行くこと一町許左ニ折れて河原ニ向ふ
を拜してかへる時は六時なりき

直ちに入浴

夕香魚又膳ニ上る 「夜向ひ側なる小野氏（中学校／教師）に「刺を通して」面会
／せんとせしか差支ある由にて会はず」

夜町を散歩し土地之産物など探かし僅ニ煙

草入一個を求む三村君は檜皮製の傘

を求む檜笠「たり清国産笠」ニ擬して近頃製出せしもの

なるへし笠裏は内務省登

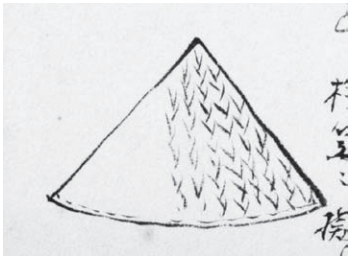
録の字及

貴賤笠

東牟婁郡皆地村

上平定之助

とあり

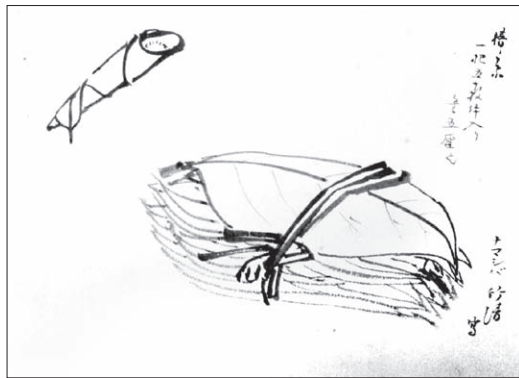


┌ (57)

椿ノ葉

一把五十枚（許）入り
金五厘也

ナマシバ 竹清
寫



┌ (58)

十六日 土曜日 晴朗
昨夜屢々めさむ

八時起床

九時半此地之人、山田正氏を訪ふ氏は山田常

典之息なり年齢五十左右能く談す

山田常典は元伊豫吉田藩ものなり水野

土佐守忠央侯に知られて出入となり後に藩士に

列す丹鶴叢書之板下を書すること十数年為め平

素病弱之身を一層弱めしといふ忠央侯は英

之士にして夙に泰西の医術を採用し江戸浄

瑠璃坂の邸内ニハ学校を起し「黒川真頼小中村清矩等来り日当二日一朱」和漢學を講せし

め兼て柳川春三（此人を用ゐて大に／藩政を改めたり）宇都宮孝之進（後、三郎）を聘して理化学を究めしめたり

忠央侯は好レ古丹鶴叢書、丹鶴図譜等の著あり三万石之小諸侯なれば財政はゆたかなるニあらず故ニ柳川春三を聘し或は塩田を起し銅を採り飯田某を蝦夷地へ遣して採檢せしむる等のことをなしたり

忠央侯の妹にひろ子といへる「絶世の美人」あり西ノ丸へ上げて

將軍の寵を蒙りて竹之丞といへる一子を擧ぐ一方伊井侯と結び内外相應して泰西之事情を將軍に通し重用せられたり

丹鶴叢書ニハ力を尽されしか幕末となりて国事多端兵備等の為め金銭の失費甚し

かりしを以て中止となれり其板木「小石川」原町の下邸に七戸前倉ニ充滿せしか明治初年ニ至りて百五十円に拂下げ「と」なり其板はつぶされたり

（59）

山田常典（文久三年七月七日没享年五十六／葬新宮）

水野中央（元治二年龍集乙丑二月二十五日／没／年五十八 葬橋本／鶴峯院殿從

五位下前土州太守篤勤日精／大居士）

丹鶴図譜の画は高崎千春なり先年大坂滯

在中熊本ノ人山東某に遇ふ其人曰紀州新宮ニ山

田常典といへるあり熊本「の方」にてはどろぼう常典といへり其訳は予（山東）の親戚の家に有名な蒙古

襲来之絵巻物ありて藩公といへとも貸與

はせず然るに一画工と名乗りて毎日訪問して熟視

すること廿日間其後此図板ニなりて水野家より藩公

に進められたり寸毫も違はず穿鑿するに新

宮に山田常典といふものあり千春をして図を

うつさせしなりとてどろぼう常典とて親戚の

もの憤れり云々（常典は落園と号し（庭ニ秋田落を植えたり）／藏書印は用ゐず

時ニ常典の二字を結びし花押を用ゆ）

幕末朝廷と徳川家との せし際幕府ニ於

て廢帝のことを議せしことありしと見え一夜深

更江戸の藩邸の居住に家老訪問せり夜中といひ

家老の来るなど重大なりしこと、見えたり急に床

敷を拂ひて招せしに一人肩衣をつけたる士を伴へ

り父（常典）家族をして二階ニ避けしめ密話一時

半許ニして辞されて階下ニ下れば二客既に去れり

父衣を改め長子をして提灯を携へしめ御殿

に行く出て行く際母を呼ひて「御家の一大事出来せり或は」このまゝ、帰らざるへし

さらは急き後事を某に談して國にかへるへし

とて其まゝ、立出しか（一同）詮すへを知らざりしか

「暫時ニして」無事帰宅して亦語らず後数日にして村田」（60）



（61）

春野来る春野は磊落の人座につくや否や先日此方

にも来れりや前田（夏蔭）の方にも行けり崎「次郎」に見えたり

アンナ馬鹿なことかあるものか前田ハアイマイ崎は賛

成をした歎だか馬鹿ナ奴じゃ云々未其所以を知らず

後に父、母に語れるは実はあの時れるは安藤

閨老の侍臣ニして廢帝の古例を調へさせん為めにて

若し事成就せば二万石の加増其士ニハ布衣以上ニ取立
へしとの事なりきかゝる無謀なることの何として御受出来へき

此事ハ死を以て君公をいさむへき決心にて若し聞かれずんば
其場を去らば割腹せん覚悟なりき幸ニ君公ももと不承
知のことなりし故無事に済みたるなり事秘密ニ附せんと

せしか村田春野の「先日のごとく」言に出て汝等の耳にも入りたればいふ也

と云し後ニ父は此事を熟懇なる大橋訥庵に通せしに

訥庵は当時浪士の集会所なりしを以て此事洩れて浪士

間大ニ沸騰し安藤閣老之要撃となり埝次郎は

九段邊にて暗殺されたりこれを斬りたるものは伊藤俊介

(博文)其人なりきと此事ハ故品川弥次郎子の直話な

りき

神宮領分記 写一冊 虫入にてぼろくゝなり

末尾ニ宝曆之写し云々明治二年写す云々とあり

土人の手ニなりしものにて最信憑申へし紀州家

にて編纂せし續風土記は現今紀州を記せ

しものにて最精しきものなるか土人の書上を徴

せしを以て当時封建之世役人の専横を恐れ如

此故事あるやとの尋問ニハ多く其種之物無之候と

返答せしもの多し或は僧侶山伏等多少文筆

あるものハ附会の説を曲筆して答申せしもの

を机上ニありて編纂せしを以て誤り非常

ニ多し一例を言へは此近傍に弁慶産屋杉

といふものありて有名と聞如此書ニよれハ (62)

寛永の頃鈴木某の旧屋敷にて其頃庭園なり

後荒廢して田甫となり此杉ノ木のミ残り居りしか

近頃弁慶産屋杉と称する(弁慶は湛海之子なり

といふ俗説あり)は笑ふへしといふこと見えたり云々

熊野年鑑 写本 一冊

一神武帝以来嘉永頃迄の事績を年表ニもの

せり虫喰多し

神武帝東征之際海中辛温暴風皇舟漂蕩

稲飯命、三毛人命両皇子海中ニ入り給ふ処ハ木ノ本の東

荒坂大字ニ木嶋

二木嶋の湾頭鯉角海を「相遍りて」抱く処西祠あり一は稲飯命

一は三毛人命を祭る神体は中古之ものなれと武装

したる木像なり

(約9行分空白)

談中ハニして山本秀次郎氏亦至る

正午辞去午後藩公之墓所を拜せんとて行く途

中一骨董店ニ立よりしに昨日遇ひし三村君相識之牛場

某声を低く其処の主人嚮導せんとて四人西ニ向て行

く中学校を過ぐる手前ニ一小石橋あり新宮の葬式は (63)

此処迄にて見送り人も僧侶も皆かへり去るなりといふ

数丁ニして一丘「字橋本」によりて白壁をうちめぐらしたる一廊あり

これ藩公の廟なり番人留守戸を排して進む一小堂あり

これより石階数十段を上りて墓石相並ふこと十数最後の

処のもの忠央公之墳墓なり其図を模して背後の丘上ニ

上る海上より此邊り見晴して景色よし稲田を隔て

一松林の茂生する一阜ありこの場処稲田より低しと思は

る、に大水の際は浸害を受けず之を浮嶋といひて熊

野七不思議の一とすといふ又前の往還を下り三輪崎

道を進むこと数丁旧道ニ入りて田甫道を過ぎたる行手

の一丘阜上墓石累々これを南谷といひて共葬墓地た

り山田常典先生之墓も此中ニあるなり尋ねめくるに

尋ね当らず遂に空しく山を下りて近道を取りて中

学校わきに出て牛場某並二道具屋主人と別れ此日行ハる

、神輿之渡御を拜せんとて急ぎ市中をよぎりて河原

ニ下れば今や神輿御舟にうつりこれニ随ふ競争之船

数艘正三川上ニ向つて出発せんとする処なり群集

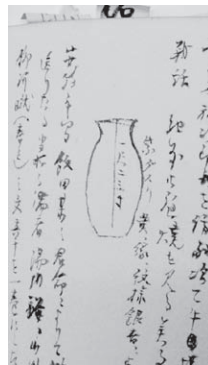
を押しわけて写真四枚をうつす此ノ邊り川下ハ川口川上

ハ山岳重々左は神倉山聳え下に新宮の森ありてなか

めよし日西山ニ没せんとすれば匆々帰寓

夜山本秋次郎氏を訪ね次て牛場某も至る

雑話 紀州御(庭)焼を見る美事也
紫グスリ 黄、緑、紋様銀杏二青



安政年間飯田某之君命ニよりて蝦夷地に行くを
送りたる当所之湯者湯川浴、山田常典之長歌
柳河賦(春三)之文章を一卷にしたるものを見す」(64)

午後十時帰宅

明朝五時出発本宮行の便船ニのらんとて日記をし
た、め終りて臥したるは十一時を過ぎたり

十七日 曇

昨夜又夢を結びがたし五時起床
六時発足「寒し」迎ひに来れる船頭に伴はれて神宮川河原ニ至
る雨いまにもふり出でん景色なり客船は此上七里計
りなる宮井といふところ迄は毎日ありされとこ、より右
へ漕、左へ本宮へ行くニハ別に船を仕立つるかに荷船ニ便乗
を乞はざるへからす幸ひ今日は「禪」僧二人本宮近く
行く人あるに會し四人にて借切りて発す時二七時なり
宮井迄ハ一人四十銭位なれと本宮迄は借切一艘六円也今
日雨ふり出でんけしなれば二割といふ処なれと一円割
増を貰ひたしといふ

舟にうつる舟長さ四間許底は平らたし富士川下る船
のとききへろくにあらずしてがつしりと出来あり客船と
て上に板の屋根をつけあり(取はづし自在)
胴の間二つに別る一方に座を占むれば舟を押し出す船夫
三人長さ三十間許太さ小指程の麻綱をへサキよりの棒
に結びつけて「三人」先きに立ちて河原の上を曳く船頭へサキ

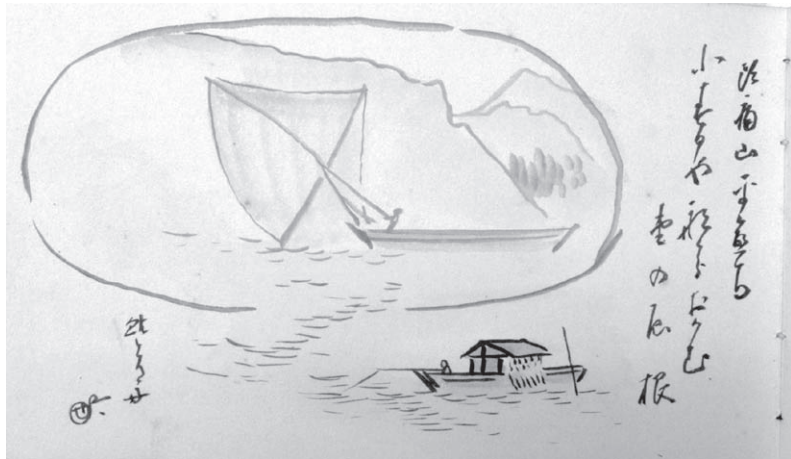
に立ちて杉の丸太の竿を以てあやつり行く或時は竿を
横に引きかけて己れ水中に入りて押し行くシヤツ、又は
腰迄の衣服に素足に草靴はきたり新宮の森を
過ぎて一曲すれば河中ニ御船寫といふ先日之祭礼ニ
は競漕之小船(此)小寫の上にて神官の合図ニよりて向ひの河
原を發して此寫を一周して下るなりといふ
乗合之二僧一は「年三十左右」童顔にして地藏肩肥満、巡廻教師と見え」(65)

一僧は土地の僧侶にて案内と見ゆ老僧なり
種々談話す



」(66)

頭痛山平愈寺
小春日や船よりおかも
堂の屋根



鮎とり舟

「(67)」

或時は深淵碧色をなす処船夫路窮りて網をワニ
手繰りて皆船にうつりカイ、竿をつかひて對岸ニ

達し又水中にとひ入りて曳き出す

大友の渡しといふあり御祭りかへりの人達の船二つづるを

写真に取る此処にて一人便乗を乞ふ、同乗す

荷物船あり船夫四人汗をながして上るに會す荷

重ければ中々に進まず河原を這ひつ、あゆむ一

奇観なりこれ二反して下り来れる船は船夫

一人へサキニ立ち竿を持ちて巧に瀬をよけつ、ゆき

或時は平均を保たん為めに身をへサキニひれふし

て行く一人はともにて櫂をあやつり行く疾きこと

矢の如し

此邊四ツ手にて鮎を漁するを見る又鮎船あり小舟

の中央にムシロ張りの小屋をつくりあり

此邊山嶽重畳けしきやうやくによし最よろこぶ

べきは境廣くして甲斐の昇仙峡のことく窮屈なら

ざるにあり

水冷屈折幾曲廻するを知らず山窮はまるどころ

路又こ、につきんかと疑はる一曲すれば山谷又漸に

開けて尽くるところを知らず、檜杖の文字ヶ瀬

いふところは川中一丘突出し水これに激して逆行

之浪を上くこと三尺只見る一荷船あり板幾百

枚をつみ板上便乗者三人をのす舟夫櫂をあやまり

て激流中ニ落ち(半回)轉をなして危く岸につく

為めに水船中ニ入りて漸く沈まんとするを見る

危(儉)いふべからず

釣鐘岩といふは絶壁の一部釣鐘形に剥落せ

しを取りて名けたるもの奇とする二足らす

瀧二三かゝるを見る一瀧は那智之裏瀧」(68)

たりといふ屋頂より空霽れて暖くなれり

字楊樹?に昔一大楊樹あり此木切られて卅三間

堂之棟「梁」となれりといふ其残株に薬師如来を刻

みありしか廿二年大洪水之際流失せしといふ此楊

樹の動く度ニ帝頭痛を病ませ給ひける為め薬

師を祭れりといふ一小字あり平愈山頭痛寺と号

すと舟中の老僧いふ、落語家のいふ一目山随徳寺

に似て山号の奇抜なること欣ふへし
和氣明神あり此後山より和氣蘭といふ名品を出す
炭鑛ありて山上よりケーブルのか、りて石炭を運ぶ
を見る此邊河原益ひろし

行きくゞて宮井に至るこ、は右は上北川「此上流瀧八丁也」左は木津
川の相合するところなり二流其色をことニし碧色
瑠璃之如き八上北川や、濁れるは木津川なり暫く
其色を異にして流る「明治」廿二年洪水以来かく濁りて今
に清まずといふ此以前新宮を予等の船三先つ

廿分許二出し客船二追つき相合してこ、に達す時二
午後二時なり先方の客を予等の方二乗せ一艘と
なし二艘の船夫六人惣か、りて曳き「本宮に向つて進む」五人河原を曳

き一人舟をあやつる人多き為め進行すみやかなり
なかめよき山河に「我等」賛嘆の声をたへずし本宮の

手前請川に着きしは四時半なり前ノ二僧並二便
乗の人共に湯ノ峯之方二行くといふに本宮は明日

にとて能きつれなれば「本宮迄九里八丁といへハ九里程なるへし」こ、より舟を捨
て、湯ノ峯に

向ふ土人の二丁許りといふ峠の約十町もあらんと思は
る、を越え二僧は湯ノ川ニ至るといふに別れ便乗せ

し人の嚮導にてせばき山道を行く時日くれ初め
て人顔もおほろ二なりぬやかて湯香しきりに鼻

を襲ふに目指す御処の近きを知りぬ
路傍一湯瀧あり蒸氣騰々たり」(69)

そこを過れば一割や、開けたる峽中に出つ旅舎數十
左右二つらなり中央を流る、水濛々たる蒸気を以
て蔽つる此処即湯ノ峯にして古來名たかき温泉

なりあづまや二投宿旅宿前一ノ橋をわたりたる処浴
室あり小栗湯といふ小栗判官之来り浴せし

処と傳ふ落心気爽快夕食を喫すこ、も又

香魚膳ニ上るに「夜具部屋を暗室に代へて」種板を入れかへ日記した、
め終りしは九時を過ぎたり昨夜小眠とて殊之

外つかれたり窓外をのぞめば又曇れり明日
之快晴をいのりつ、ふしどに入る

船夫の穿つところの草鞋一足三錢有り日二三足
を費すとヲバタの女子之を作るに妙多くヲバタの
特産とすと

十八日 月曜日

午前六時起床窓を排せば湯の気峽中
二立こめて霧のことし空もや、くもれり

八時出立薬師堂に詣つ東光山と号し名高き薬
師なり持佛堂の左右之扉は兆殿司之筆と傳ふ

何さま徳川氏時代のものとハ見えす本堂は片桐且
元之奉行にて建築せられしものなりしか去明治卅
六年に焼失せしといふ惜しむへし祠前二一小鉄

釜あり鈴香立となす其周囲二
とあり形図に示すかことし

温泉縁起御守等を受けて本宮二向ふ
一時を越ゆ 山中老鶯しきりに鳴き秋花乱

れ咲く」(70)



」(71)

熊野湯ノ峯温泉

十月十八日

朝

あづまや

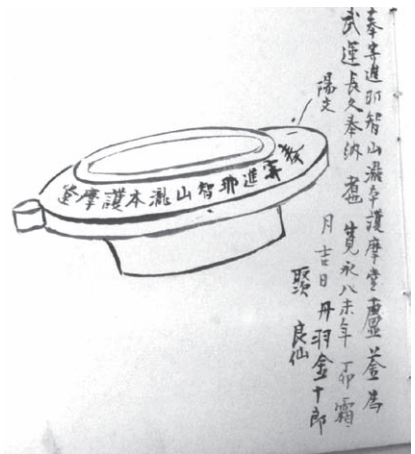
楼上より

うつす



奉寄進那智山瀧本護摩堂盧釜為
武運長久奉納 者也 寛永八末年 丁卯 霜
月 吉日 丹羽金十郎
取次 良仙

(72)



先年の火災にかゝりしと見え鉄色赤し
頂上に爰より小栗判官車塚の由来と書きたる石標あり
上り壺二丁ある様ナレハ登らすして過く車塚の名は
古墳の一名なり果して古墳ニや如何小栗判官云
ニは後に車塚の名ニよりて附會せしや明々し
こ、より路下りなり遙の下に熊野川をのぞむ下ること十
数丁ニして人家ある所ニ出つこれ本宮の町なり町の
長さ五六町「熊野川に沿へる」一小駅ニ過ぎず町のはつれにさ、やき橋
といふありこれより二町許ニして往還に面して図表
立つこれ本宮なり宮は元河原ニありしか廿二年
の洪水ニ流失せしを以て今は此丘上に新に宮居
を造営し奉れり社は別格官幣中社なり
石階数十段を上れば丘上や、空潤參拜之後社務
所ニて午王、御守を受けて下山途中、「和泉」式部歌塚
あり傍らに擬宝珠数個をかためて置きたり就て
見るに先年流失せし本宮橋のものなり銘は
元和六庚申
和泉式部歌塚

(73)



郵便局ニ寄り宅へのはかき四葉投函
町にて本宮製の箸、土瓶敷(シユロ製)等を求め

大小あり

求めしものは

高一尺許の

もの

畑行の際携ふるもの

方言イドコ海岸にては

「ヒノキボツコリといふ」(74)

ヒノキノ皮製籠

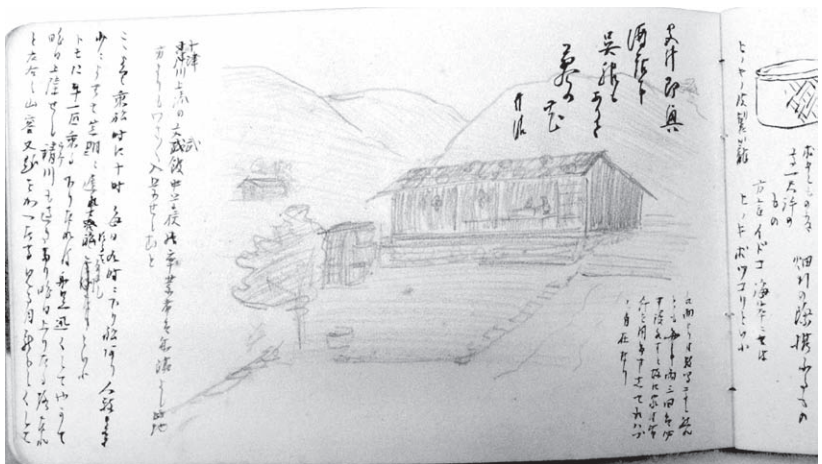
水面よりは数間高し然れ

とも毎(年)兩三回は必

す浸水すと故に家は皆

釘を用ゐずして取はづ

し自在なり



木津(十津)川上流の文武(館)中学校の卒業者は成績よし此地
方よりもわさく入学せしむと

ここより乗船時に十時毎日九時に下り船あり人数の多
少によりて定期に遅れて発船「あること多し」といふ

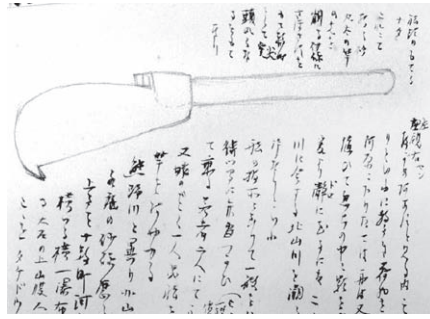
トモに午一匹乗る下りなれば舟足速くしてやかて

昨日上陸せし請川も過ぎたり昨日上りたる路なれ

と左右之山容又趣をかへたる見る目新しくして」(75)

なめあかず
下りは、船夫口を押し船頭へサキにありて竿をあやつる
瀬に至れば船底砂礫にふれてカツ／＼として音あり

船頭のもてる／＼ナタ／＼これにて／折々杉／丸太の竿／の先を／削る砂礫に
／さほさすを／もて暫時／ニして尖／頭丸くな／るをもて／なり



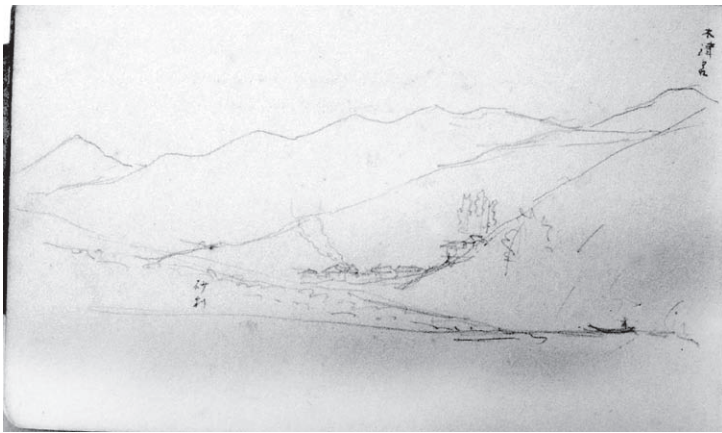
左顧右ベン

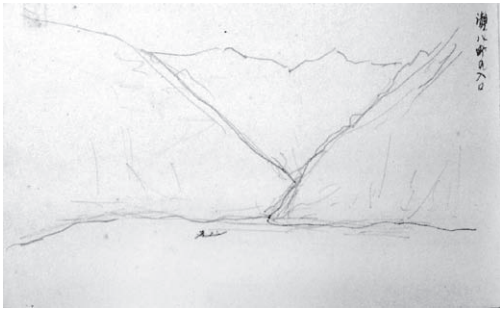
ながめあかずと見る内にて宮居な
りといふに驚き荷物をまとめて
河原二下りたては舟は又流れに

随ひて忽ちの中二影を没しぬ
爰より漕に至るにはこゝにて熊野
河に合する北山川を遡ること五里
許なりといふ

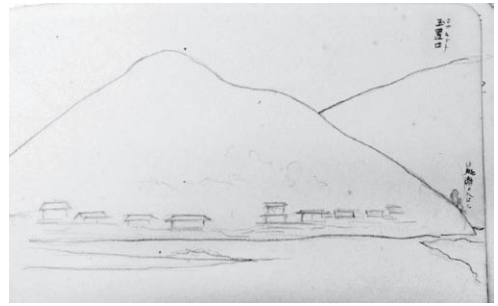
船の指所ニ至りて一艘を仕立てもらふ
待ツ間に弁当つかひ(こゝより漕迄往復／一艘四円五十銭の定／價なりと)
て乗る若者二人にて舟をすゝむ
又昨のごとく一人曳船をなし一人
竿をあやつる
熊野川と異り北山川は水清く

水底の砂礫歴々数ふへし
上ること十数町河中一大怪石
横ハる横一瀑布絶壁よりか、
る大石の上山腹人家十数あり
こゝをタケドウといふ大和
國に属すと
河原より木屑を拾ひて「竹清君」昆爐口火を吹きて茗を煮る
一碗：茗茗とるに俗腸を洗ふへし」(76)





┌
(79)



┌
(78)



┌
(81)



┌
(80)



「(82)」

山はや、色つきて秋色やうやく深し
船頭の
もの言はずして秋悲し

上ること三時間許木津呂にいたる「丘上人家十数」炊煙ゆるく騰り
て暮色漸く迫らんとす岬角を一周するに水路
険悪船底屢々カツ／＼の響あり時を費す約半時
にして玉置口に至れば既に秋の日のくれんとして
山腹の人家もや、おほろげなり
此はなをめぐれば即ち瀟（たふ）なり此間八町峡中漸
く相迫り水碧潭をなして「恰も湛え」たるに似たり故
に瀟の字あり

舟峡中に入れば既に暮色暗憺として寇に 人を秘するかとし眼を張りて僅に写生の筆

を採る「櫓声こだまに響きて物すこし」峡中幾屈折屈折することに景新也
只其くらきを憶む「高處ハ」忽ち舌とし暗中ノ燈光見ゆ
船夫暗中声を発して其瀟に着したるを報す「舟」漸

く其燈下さす崖下ニ至る船夫又大ニ呼はつて
客来を報すれば崖上僅に応ずるあり即ち

舟をすて、 を踏むて「崖上に」遠「し船夫共に」来て投宿

宿の名を下田戸屋といふ

こ、は向ひは三重縣イセ、右の向ひは和歌山縣此地
は奈良縣三縣相接するの地なり

郵便局は二里許玉置にあり避遠の地なること知るへし
こ、の御土産は絵はかきのミなり卅年頃東久世伯

来遊されてより年々観光の客を増すと

此宿は此地二軒のミ人家といふても数軒に過ぎざる」(83)

様なり

夕食、鯔ノ干物ニ吸物ハカマボコニ麩なりなまじいの

魚よりハ干物の方はるかニよし

ランプ暗ければ蠟燭をもて来さしむ蠟燭なしと見

え提灯にともしてくるも一興なり此燈火「の下に」て日記した

、め終りしは九時過ぎたり

十九日 火曜日 雨

七時起出れば夜来之雨未止まず白雲去

来前山陰顕出没奇いふべからず朝飯又鯔の干

物をつく寒村思ふへし宿泊料、昼飯のむすびをこめ

て四十五銭廉といふへし

八時船夫を促し昨夜之小舟に投じ傘の下にうづく

まる舟又瀟の峡中に入る昨夜模糊の間僅に

たとへ別景之如し「○」船夫指して「直立せるハ」位牌寫

など教ゆ

嗚声ゆるく峡中を過ぎ

○懸崖一橋か、るはりがねの釣橋なり此峡又別に舟

を通すること五里許「薪」炭木材等之産物あり戸数二

百戸に足らされど物産多しといふ

玉置口、木津呂も過ぎたり雨盛んにふり出て

時に舟夫船中ニたまるアカを汲出す暫くあり

て雨又止む「只見る」白雲山腹に横ハる一帯をひくかごとし

忽ちにして山頭を覆ひつくし沛然として傘に

注ぎて声あり
玉置口にて児童十数雨傘をかざし渡船にて行く」(84)

を見る通学の途次なるべしか、る様を都會之

児童ニ見せたし

艚の音「にこたふ」こだまも秋の声

宮居につきしは十一時なり十時二一番船(新宮行)

出たりといふに二番船を仕立てもらひ其間下田戸

よりもて来る行厨をひらく塩もつけざる握飯を

調あるのミ塩をもらひて僅に食す素飯

を食せしは去卅九年頃三州の伊良胡崎の「外」海岸

を旅行せし折と今回となり

船の出発をしらする為め法螺貝を吹く雨雲

か、れる山々に反響して淋し

十二時出船 こ、よりは客船たれば昨日乗りしとき

屋根ある舟なり昨日之晴朗ニ引きかへたる天気なれ

は直ニ横臥景色を賞せんともせず

神宮ニ着きしは五時なりき河原に鳥むれつどあり

雨を冒して旅館油屋ニかへる「此度ハ」往來を距てたる別

館ニ案内す今年七月に没せし先主人ハ風流之志

厚く書画を好み篆刻をよくし別館ハ数寄をこ

らせりかけたる軸額など面白きもの多し、陶翁之

額ニ花ノ屋法橋(桑名ノ人穂山唯念) 田家遠暮其他親

月の二枚折、三角、南濱其他張交之屏風等あり
室清く且つ清閑欣ふへし雨漏之音聞きつ、十時」(85)

過る頃就寝

廿日

昨夜熟眠今朝起つれば雨全く止み日影うら、かなり

絵はかきを岡田、松廻舎、魯庵、上田諸氏へ発す

十時乗車して那智ニ向ふ車の先きには例の

こたく洋犬ありて曳く十五日通過せし道を通過し

一峠を越「て海邊に出て」三輪崎に至る、これより暫時海邊を

過ぎ又山を登る峠の茶店ニ休憩車夫の昼食す

るを待つ茶店に小猿あり主人ニまつわる今年生れ

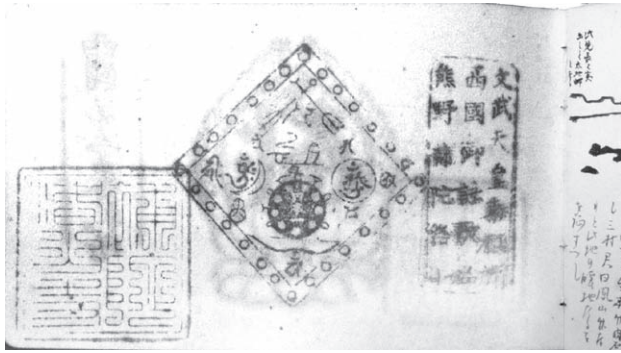
のものなりといふ此処一面海をみはらし右に岬

角長く突出すこれを太地崎といひ鯨の漁場な

りといふ



近年鯨船は砲を以て鎗を
投する為め其音響之為
めに鯨は元より他の魚類
も寄ること少しなど車
夫いふ車上サバの酢を



類張りつゝ、行く
山を下りて又海邊近く行
きて一社に達す濱の宮
といひ有名なる補陀落
寺「観音」と軒をならべて鎮座
す此地神武天皇〔行宮〕の
跡とて一区を畫し石
標を建て、表す、境内
濱ノ宮ノ傍に丹鶴戸部
を祀れる小祠あり〔小石合祀あり〕三狐神と題ス
又境内に一種の竹藪あり
十月尚筍を生ず竹肉厚
し三村君曰鳳山竹な
りと此地の暖地なること
を証すへし」(86)

「
(87)



古昔補陀落寺の住職にして年老ひたるものは
一舟に乗せて流せしこと慣例にしてこれを御渡海と

「
(89)



「
(88)

称したるものなり蓋し支那の補陀落山へ渡る意なるへし然るに未だ年暮せざるものも無理に捕へて流せしこともありしと新宮ノ山本氏語る此寺を守る老僧頗る不得要領昔しならハ最早御渡海ものなるべし

こ、「を過ぎる」こと数町勝浦路にわかれて山手ニかゝる路爪先上りに井関を過ぎて市野に至る途桶の列入にて忙ハしきを見る

こ、より車をすて、車夫の饗導にて那智瀧ニ向ふ瀧途十二町といふ新道のや、道緩なるを選びてのほるあえぎ／＼のほれバヤがて瀑布の頂上森の梢に現ハる「時に」材木をつみたる牛車下り来る即ち撮影す数曲にして石階を踏みて下る両側之「老」杉直二天に影して昼尚暗く石階苔なめらかに冷氣肌を襲ふ倍々たる瀑声漸く耳を聳す

懸峯幾十丈一大白布を垂れたることしこれ幼き折りより耳にせし那智之大瀧なり

竹清子衣を軽ふして瀧壺を極むやかて瀧下豆人現ハる又撮影す懸崖直立幾十丈全景をカメラに納むることかたし

竹清子手を挙げて招く即又岩をふみ分けて瀧壺に向ふ途子のかへるにあふ衣袂共にうるほふ瀧壺はいと浅しといふ（心中ひそかに華嚴瀧の方崇／高なるを想ふ）

元の処ニかへり衣服をと、のへて神宮に詣つ石階幾百段足つかれ、息苦しあえぎ／＼して

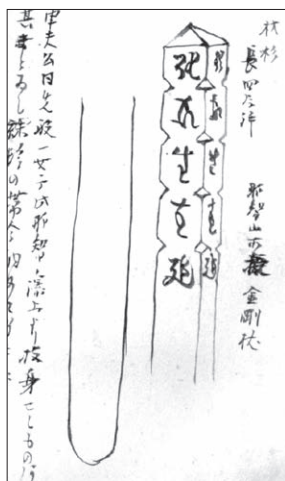
観音ニ至る此邊又瀑布を正面に見て景よし」(90)

一段高地に那知神宮あり参拜、観音ニ詣て御札等をうけ堂前の茶店にて箸を求む煙草入、奇石等ノ土産物をひさぐ此店の老翁種々土産を案出すといふ折悪しく不在にて談話を聞かざりし

ハ遺憾殊に「神宮にて」午王を受けざりしは残念、午玉は観音之方とばかり思ひ神宮社務所ニあるに思ひ至らず其ま、に過ぎしなり観音ノ御堂（御堂ハ保護ノ建築物）

内ニ金剛杖をうる面白けれど持帰へるに不便なれば求めず

材杉
長四尺許
那智山所授金剛杖



車夫曰先般一女子此那智瀑上より投身せしものあり其まどし緋珍の帯今納めて当寺にありと番僧曰御見せ申さうかと、宜しく願下けにして出つ一鐘樓あり一大梵鐘かゝる銘よみかたし竹清子子を肩車にして即鐘にすがつて字をたどるに陽文尽く削り去つて只、享ノ字八月日ノ数字を讀み得るに過ぎざるは惜しむ「べ」し思ふに維新の際神佛分離之際狼狽銘を削りしもの歟

山風たゞちにふき立ちて冷氣身にすれば忽々にして山を下る石階幾千段にして「や、平」坦路に出つ一橋あり下馬橋といふ其銘二日」(91)

瀧見物二二時間を費せしわけ也

先きの茶店ニ戻れば時二四時なり命し置きし昼飯を喫す、ズイキを橙々の酢のもの「に」せしが旨し此邊蜜柑、橙々、なと人家の傍らにうへたるを見る

那智は飴の名物たり水飴並ニブッカキあり此邊餅米のよくとる、処にてそれより製するをもて味殊によしとて茶店の主婦ほこる

処ニ車に上り又元の道に出て海邊近く行く薄暮秋

那智は飴の名物たり水飴並ニブッカキあり此邊餅米のよくとる、処にてそれより製するをもて味殊によしとて茶店の主婦ほこる

処ニ車に上り又元の道に出て海邊近く行く薄暮秋

処ニ車に上り又元の道に出て海邊近く行く薄暮秋

処ニ車に上り又元の道に出て海邊近く行く薄暮秋

処ニ車に上り又元の道に出て海邊近く行く薄暮秋

処ニ車に上り又元の道に出て海邊近く行く薄暮秋

処ニ車に上り又元の道に出て海邊近く行く薄暮秋

冷身にしむ天満を過ぎて勝浦に至りなきやに
投す海濱にのぞめる地なり勝浦は一小湾二三の□
船泊するを見る時に五時

古座川の上流二一枚岩の奇勝あり又申本村無量寺
に蘆雪並二応拳之襖絵ある由本宮行の舟中の僧
より聞きて一見せん筈なりしか勝浦につき見れば
少しく勝景にもたれたる気味且つ日 もはか□
らざれば此寺の見物は見合とし此夜一時出船
之大阪行ノ汽船にて田邊行に一決

主婦をとらへて此地産するところの鯉船

の模型の有無を問ふ正月には賣るところあれど「近在よりかせぎに来る漁夫買求
めて土産ニ／＼するなりといふ」

今は無し其正月ニ賣るものも年々少なくな
り行きたれば今になくなるへしといふ

夕食前町を見めぐらんとて竹清子と出つ町とハ

いへ二三町行けば直ニ海濱に出つること狭き地
なり但し船着きなれば球戯場よりコツ／＼の音

を聞き楼上より絃歌しきりに聞へ化粧ノ者
町をありくを見る

ゑはがきを求めながら又鯉魚船のことを聞く
に球戯場の裏手に駄菓子など商ふ一小戸

あり正月ニハそこにてうるが今はなかるべしといふ
に或はうれのこりもやと其家ニつきて問へば「(92)

老嫗コレカノシといひて店の小蔭よりほこりを吹きつ、
取り出すを見れば正しくそれなり今一艘よりなし
といふ予は既に所持すれば竹清子ニゆつる(價廿六錢)
此玩具は太地崎にて製造して此地に持ち来りて
うる之れをうる店は此家一軒なりといふ「價も」割に高け
れば、此玩具も程なく絶ゆるなるへし

汽船待つ間に日記した、めなどとする
折から汽笛の声聞え直ぐ乗組むへ
しとの事ニ急ぎ女中ニ荷物
もたせて教町あなたの波止場

に至る既に七日之月落ちて
湾内碇泊の燈光点し散見す

るのミ、櫓声ゆるく櫓頭、燈火
を点したる汽船二つく舩川丸とい

ふ「やかて上船時二夜十一時を過く」一号室内愛知丸より清らなれ
と動揺甚し直ニ臥床

半醒半睡之内ニ一夜を過こす
暁ハ一港ニ入る周参見なるへし

朝六時田邊二着
朝暾寫山より出てうつくし

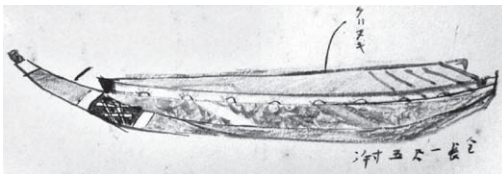
直ニ上陸、海邊なる錦城館へ
投す此地一等の旅館なりと

田邊は紀州ノ家老安藤氏の城下
なり城今廢す旅館之邊即之

れなりと
ねむき目をこすりて町を見あ

りく学校、茶屋等多きところに見えたり
町きた、すまゐ何となく落付きて住まひ

よき土地なるやと見ゆ



紀州田邊産 アタマ風

裏 ハク 西ノ内二枚 一枚四枚等モアリ

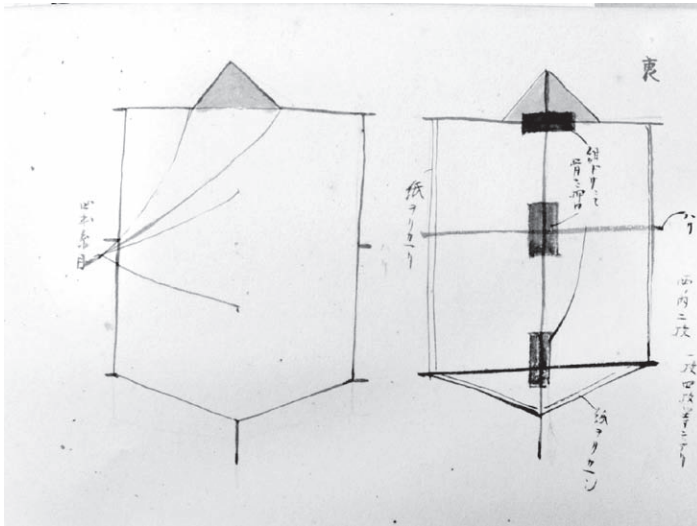
紺下サニテ

骨を押ゆ

紙ヲリカヘシ

紙ヲリカヘリ

四本糸目



「(94)

(白紙) 「(95)

道々古道具店をひやかし鬮鶏神社に詣る途蟻通社
ニ詣す鬮鶏神社は町を東方ニ距ること十数町ニあり

某去就を決せんかために社前ニ鬮鶏

せしといふをもて名高きものなり按ずるに鬮鶏は年
中行事の一ニして鎌倉八幡社前ニ鬮鶏野といふ処あり

「後世云」源平の故事をもて附會せしものなるへし

六社を祭る種々宝物あるよしなれど平日は見せず帰途
ニ就く

玩具店ニて此地特産之玩具、アタマ風、コメツキ車、

春駒、天神祠、等を求め骨董店「古道具や」ニて童子人形「アヤキ笠を着した

り／田楽をうつせしものか」、

ヲランダ「模様」うつしの香爐、並ニ「古代」更紗、「浮世絵風祇園祭ノ図也」風

呂敷をもとむ

此更紗は和蘭模様を日本化して周圍ニ山鉾の

模様をつけ中央ニは浮画風ニ祇園祭礼之図

を画きワクと中央との間ニハ花模様を出せり

風俗より察するに文化頃のもの歟價は高けれ「金五円」

と兎ニ角珍物なり直ニ其骨董店ニて荷つ

くりをなさしめて小包ニ出す

午饗をとある鳥屋ニてした、め「本通り」を會津橋迄

至る海見え丘もあり石器時代之遺跡さては古墳

などあるへき地勢なり日晴れて暖かに何と

なく京都の郊外ニも似て穏和なる町のさまな

り「門戸ノ入口ノ鴨居ニ御符受の箱必ずあり」

此地近傍産する古屋石を以て名産とし諸処ニて

賣る就て見るに意ニ通するものなし竹清君ニ

別れひとりひげを剃る客待つ間此地発行する

牟婁新報を見る町長攻撃ニて全面を埋む何

となく鬮牛角上ノ争といへることも思ひ合ハされて

いやな心地す

三時帰寓すれバ竹清君は又出てあらずあまりに「(96)

ねむければ横臥する内華胥二遊ふ下婢の入浴を
す、むる二驚かされて目さむ時二四時元気快復
入浴竹清君もかへる又町をあるき「福路町二」弁慶産屋
松を見たりとて写すを示さる(新宮之処参照)

〔且つ〕重けれと土産とて古瓦石一個を求めたり
とて見せたる 諸処へはかきを出す(赤松、ヒロ田、宅、内田、岡田等)
やかて夕食 桃花園三千丸ノ短冊一枚入手

夜又ひとり市中を見めぐる暗中屋敷町をありき
突如古谷石のミを商ふ店前二出つ就て陳列之諸品

を見大小二個を求む、古谷の地古昔より山水石を産す
地は西牟婁郡にあり内に羊歯尾谷、カイダリ、
並二南部ノ奥瓜谷あり瓜谷は維新迄は御留山にして
採掘を禁せり此石は岸壁

に其脈厚二尺程余り厚きハ
なし)二個処或は三ヶ処ありて
これを掘るなり石は表面ボロ

くくの岩二つ、まれあり採掘
せし工金槌にて叩き見其
音響二よりに岩中二包ま

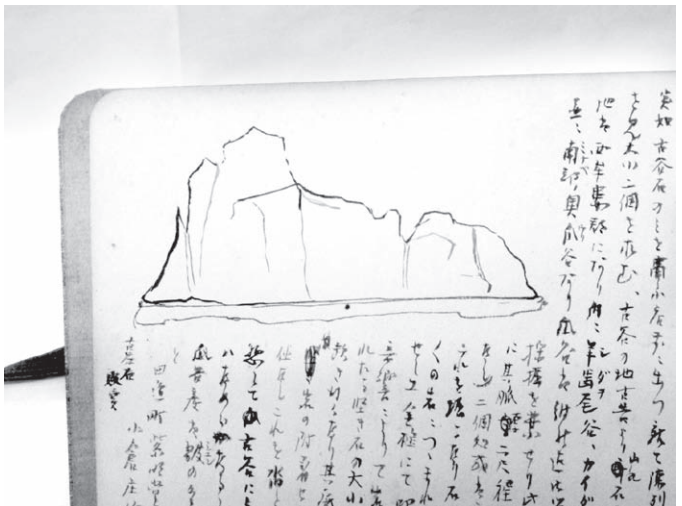
れたる堅き石の大小を察して
缺き行くなり其底部に此柔かき
岩の附着せざるは價

値なしこれを沓といふなり
惣して古谷に産するもの
ハなめらかなるもの多く

瓜谷産は皺の多きもの多し
と

田邊町紫明堂
小倉庄作
古谷石
販売

突如古谷石のミを商ふ店前二出つ就て陳列之諸品
を見大小二個を求む、古谷の地古昔より山水石を産す
地は西牟婁郡にあり内に羊歯尾谷、カイダリ、
並二南部ノ奥瓜谷あり瓜谷は維新迄は御留山にして
採掘を禁せり此石は岸壁に其脈厚二尺程余り厚きハ
なし)二個処或は三ヶ処ありてこれを掘るなり石は表面ボ
ロくくの岩二つ、まれあり採掘せし工金槌にて叩き見其
音響二よりに岩中二包まれたる堅き石の大小を察して
缺き行くなり其底部に此柔かき岩の附着せざるは價
値なしこれを沓といふなり惣して古谷に産するもの
ハなめらかなるもの多く瓜谷産は皺の多きもの多し
と



古谷石之談を聞くこと一時間許帰宿すれば十時竹清
君既に寝ねたり予もふしどに入る(98)
裏見返し